

タイトル	『シトウ・パンチェン自伝』一部訳注 シトウ・パンチェンの第1回麗江行
著者	山田, 勅之; YAMADA, Noriyuki
引用	北海商科大学論集, 13(1): 1-27
発行日	2024-02-20

## 訳注

## 『シトゥ・パンチェン自伝』一部訳注—シトゥ・パンチェンの第1回麗江行—

## 1. はじめに

シトゥ(si tu)はチベット仏教カルマ(karma)派化身ラマ(sprul pa'i sku)の名跡の一つである。名前の由来は明の永楽帝から大司徒という称号を授与されたことによる(Douglas and White1976: 155)。その8世であるシトゥ・パンチェン(si tu paN chen)<sup>1</sup>は、1699/1700年<sup>2</sup>にカム(khams)<sup>3</sup>のデルゲ(sde dge)に生まれた。彼は8歳の時にカルマ派のシャマルパ(zhwa dmar pa)8世ペルチェン・チューキ・トゥンドゥブ(dpal chen chos kyi don 'grub)からシトゥ8世に認定され、1774年に遷化した(Smith1968: 8-9, 11)。

シトゥ・パンチェンは14帙に及ぶ著作集を残しており、その業績は広範囲に及ぶ。すなわち、多くのサンスクリット語文献をチベット語へ翻訳し、デルゲ版カンギェル(sde dge bar bka' 'gyur)<sup>4</sup>の編纂に当たるなど、仏教学への貢献度が高いのはもちろん、チベット語文法の大著を残し、また医学を学ぶとともに、優れた絵師でもあった。さらに中国の伝統的な天文学や占星術にも関心を持ち、中国語からチベット語への翻訳を行うなど中国語も堪能であった(Smith1968: 7-8)。

また、シトゥ・パンチェンは多くの地域を旅したことも知られている。中央チベットや東チベットのミニャク(mi nyag)、ギェルモロン(rgyal mo rong)のほか、ネパールや、雲南などを訪れている(Smith1968: 7-8)。このうち雲南には1729~30年、1738~39年、1758~1759年の3度訪れており、麗江<sup>5</sup>を中心にその西北部を訪れている。これらの様子は『シトゥ・パンチェン自伝』に記録されている。

『シトゥ・パンチェン自伝』の構成は大きく3つに分かれる。まず最初は生誕から24歳(1723年)までで、シトゥ・パンチェン自身によって書かれた自伝である。第2の部分は1724

<sup>1</sup> シトゥ・パンチェンはシャマルパ8世からシトゥ8世に認定された際、チューキ・ジュンネー・ティンレー・クンキヤブ・イエシエー・ペルザンポ(chos kyi 'byung gnas phrin las kun khyab ye shes dpal bzang po)の名を授かったが、その後同じくシャマルパ8世から優婆塞戒を受けた時に、カルマ・テンペ・ニンチエー・ツクラク・チューキ・ナンワ(karma bstan pa'i nyin byed gtug lag chos kyi snang ba)という名前も与えられた(Smith1968: 9)。なお、パンチェンは尊称で大学者を意味する。

<sup>2</sup> Smith(1968)によれば、このような生年の違いは、当時のラサ政府が用いた暦とカムのその違いに起因しているという(Smith1968: 9)。

<sup>3</sup> カムはチベットの地理呼称である。現在の行政区分に従えば、チベット自治区東部と四川省西部、雲南省西北部、青海省東南部にかけての地域に該当する。

<sup>4</sup> カンギェルとは経・律・論の三蔵のうち、経と律を編纂したものである。論を編纂したものはテンギェル(bstan 'gyur)と呼ばれる。

<sup>5</sup> 麗江はチベット語ではサタン(sa thang)、あるいはサタム(sa dam)と呼ばれる。またナシ(納西)族はチベット語ではジャン(jang)と呼ばれるが、ジャンを麗江、あるいは麗江を含む周辺地域を表すことがある。訳注では原文の表記を音写する。

年～遷化までの間で、シトゥ・パンチェンが記した日記を基に、彼の弟子の一人であるペロ・ツェワン・クンキャブ(*be lo tshe dbang kun khyab*)が編集したものである。最後の部分は編者がシトゥ・パンチェンの死と葬儀について記している<sup>6</sup>。

このうち、第 2 の部分について言えば、シトゥ・パンチェンが記憶に留めたい日々の出来事、たとえば地震や日食、月食のような自然現象、彼自身が見た夢、旅先での儀礼の授受をはじめとする行動の詳細などが記されている(Smith1968: 12-13)。もちろん、訪れた個々の地名や寺院名、氏族名、個人の名前や職名などもそこには記されている。すなわち、この『シトゥ・パンチェン自伝』は 18 世紀チベット世界<sup>7</sup>の歴史の重要史料の一つと言える。

管見の限り、容易に閲覧できる『シトゥ・パンチェン自伝』のテキストは、SP、SPSB、SPSB-S の 3 点である<sup>8</sup>。SP は International Academy of India Culture から 1968 年に *Śata-pitaka* シリーズの第 77 巻として発行された。具体的な底本の明記は見られないが、オリジナル版からの複写であると紹介されている(SP)。SPSB は『シトゥ・パンチェン著作集』(a)に『シトゥ・パンチェン自伝』が収録されているテキストである。*palpung sungrab nyamso khang* から 1990 年に出版されたもので、オリジナルの出版地がペルプン(*dpal spungs*)寺<sup>9</sup>の印刷所(SPSB)とされることから、底本の版は SP と同じものと思われる。SPSB-S は四川民族出版社から 2014 年に出版された『シトゥ・パンチェン全集』の第 14 巻に収録されているテキストで、これはカルマ・ギェルツェン(*karma rgyal mtshan*, 嘎瑪降沢)が校訂した活字本である。底本はペルプル寺に収蔵されているものである(SPSB-S: 6)。

以上からこれら 3 点のテキストの底本の版は同じであると思われるが、SP と SPSB が底本からの複写である一方で、SPSB-S は校訂された活字版であるという違いが見られる。

『シトゥ・パンチェン自伝』の概要を述べたものに Smith(1968, 2001)<sup>10</sup>がある。また、Jackson(2009)はシトゥ・パンチェンの事績を網羅的に明らかにした点において、意義ある研究である。その中に『シトゥ・パンチェン自伝』の記述に基づいてシトゥ・パンチェンの 3 回にわたる麗江行について描出し、そこで記録されている地名や人物の同定が試みられているが、十分とは言えない。一方、中国では馮(2021)において第 1 回麗江行の一部訳出が見られ、また木(2022)では 3 度の麗江行を対象に一部訳出が見られる。しかしながら、研究目的がこれらの訳出を通じて、清朝とチベットとの文化交流や政治的関係性の深化を顕

<sup>6</sup> 一般的にチベット語文献の書名は、修辞を加えた文章の形式をとるものが多いため、他言語への翻訳に際しては、内容を踏まえた意識となることが多い。Smith(1968)では *The autobiography and diaries of si tu pañ chen* と訳しているが、後から編集が加えられていることから、日記そのものが掲載されているわけではない。したがって、本稿では『シトゥ・パンチェン自伝』と記す。

<sup>7</sup> 本稿におけるチベット世界とは、チベット語を母語とする者たちによって、仏教に基づく価値観が共有される世界とする(山田 2011: 12)。

<sup>8</sup> SPSB-P はペルプン寺所蔵の『シトゥ・パンチェン著作集』の複写版であるが、(cha)、(ja)、(nya)の 3 巻のみであり、『シトゥ・パンチェン自伝』収録の(a)はない(SPSB-P)。なお、チベット語の伝統的な書籍形態であるペチャ(*dpe cha*)は、帙数の表示を数字ではなく、チベット語の基本 30 字の配列順に表示するのが一般的である。

<sup>9</sup> 1724 年、デルゲ王テンパ・ツェリン(*bstan pa tshe ring*)が施主となって建立。以降、歴代のシトゥが座主を勤めることとなる(Smith1968: 9)。

<sup>10</sup> Smith(2001)は Smith(1968)の再掲である。

在化させることにあるため、地名や人名の同定に向けた精査に必ずしも力点が置かれているわけではなく、その根拠となる史資料の明示がなされていない場合が多い。また、『シトゥ・パンチェン自伝』には複数のテキストがあるにもかかわらず、これらの論考ではテキスト間の異同の確認はなされていない。

このような先行研究の状況と『シトゥ・パンチェン自伝』の歴史史料としての価値を踏まえると、これの訳注を行うことは、18世紀の東チベットや雲南の社会状況把握の基盤を形作るものであり、意義あることと考えられる。

そこで、本稿ではテキストの翻刻と訳注を行う。まず、翻刻はオリジナルからの複写で、出版年が最も古いSPを底本として、SPSBとSPSB-Sと比較しながら行う。次いで訳注を行う。地名や人名については、シトゥ・パンチェンが現地で聞いたものを筆写していることから、現在の綴り字とは異なる場合が多く見られる。そのため、その同定は容易ではないが、辞書などの工具書、及び地方政府編纂の地名録や地方志などの編纂資料だけではなく、漢文とチベット語の歴史史料や20世紀前半に中国西南地域を探検・調査したロック(Rock)の論考<sup>11</sup>、さらには現地研究者や住民への聞き取りなど現地調査の結果を用いて可能限り検証していきたい。また、紙面に限りがあるため、本稿では第1回麗江行の記述の部分を対象とする。第1回麗江行では、麗江方面からの招待を受けて、往路ペルブン寺からペルユル(dpal yul, 白玉)、パタン('ba' thang, 巴塘)、リタン(li thang, 理塘)、チャテン(cha khreng, 郷城)、ゲルタン(rgyal thang, 香格里拉<sup>12</sup>)、麗江、鶴慶、さらに大理と鶏足山<sup>13</sup>にまで足を延ばしている。他方、復路は往路とやや異なるルートをたどっている。たとえば鶴慶を通らずに上牛街を通り、またチャテンは通らずにダパ('da' pa, 稻城)を経由している。

では、翻刻と訳注に入る前に、ここで対象地域の歴史地理について簡単に紹介しておきたい。

シトゥ・パンチェンが第1回麗江行で訪れた地域は、現在の行政区分に従えば、四川省西部及び西南部から雲南省西北部にかけての地域である。麗江以北の地域はチベット世界の南東にあたり、チベットの地理呼称ではカム南部のポボルガン(spo 'bor sgang)に概ね該当する。このうち現在の迪慶チベット族自治州はチベット族が多数居住する地域であるが、ナシ族、イ(彝)族、リス(傣)族などの居住地域と重なる多民族地域でもある。これらのうち、ナシ族は麗江市古城区と迪慶チベット族自治州に隣接する玉龍ナシ族自治州に集住する民族である。また、麗江以南の鶴慶や大理一帯は、ペー(白)族が多数居住する地域である。

---

<sup>11</sup> ロックはナシ族の研究史において、最も重要な研究者として挙げられる。ナシ族宗教經典の収集・翻訳・注釈や宗教儀礼に関する研究に大きな貢献が見られるだけでなく、麗江を中心とした中国西南地域の探検・調査記録を残している(黒澤 2007: 26)。

<sup>12</sup> 2002年に中甸県は香格里拉県へ名称変更され、さらに2015年に行政単位が市へ変更された。したがって、2002年以前に発行された関連文献では中甸の名称が使用されている。

<sup>13</sup> 鶏足山は賓川県の西北に位置する仏教聖地である。釈迦の弟子迦葉の道場であり、入滅の地という伝承がある。明代以降、寺院の建立が相次ぎ、多くの僧侶の修行の場となった(李 2003: 47)。漢地仏教だけではなくチベット仏教の聖地でもある(李 2014)。

麗江以南のこれらの地域では、モンゴル帝国とそれに続く元、その後の明清代にかけて、非漢族の首領に土司や土官と通称される官位が授与され、その世襲的統治が認められていた。このような間接統治を土司制度と言う(山田 2011)。

1382(洪武 15)年、明朝の軍隊が雲南に進入して来ると、当時麗江の支配者であった阿甲阿得は明朝に帰順し、「木」の姓を賜り、土司職に任じられた。その一方で木氏土司は、15世紀半ば～17世紀半ばにかけて、ポンボルガンの大半を軍事占領し、移民を推し進めた。これらの地域のナシ族の一部は、その当時の移民の子孫とも考えられている。また、木氏土司はカルマ派の高僧たちと交流し、麗江版カンギュル('jang bar bka' 'gyur)の施主を務めた(山田 2011)。

しかしながら、この木氏土司による統治は17世紀半ば、グシハン(Mon. *güši qan*)の第5子イルドゥチ(Mon. *ildüči*)の長子カンドゥ(Mon. *kandu*, Tib. *mkha' 'gro*)の侵攻により終了する。その後、グシハン一族の内紛の結果、カンドゥの勢力は一掃され、ダライラマ(*ta la'i bla ma*)5世によって、当地のチベット系首領たちに統治権が認められていく(山田 2015: 99)。そして、木氏土司自身は1723(雍正元)年、雍正帝の命により改土帰流となり、麗江は清朝の直轄下に入る(『木氏宦譜』: 65-66)。

他方、清朝は1726(雍正 3)年、青海ホシュート(Mon. *qosirud*)のロブザンタンジン(*blo bzang bstan 'dzin*)の反乱<sup>14</sup>鎮圧後、ダライラマ政権・青海ホシュートの影響力の排除を目的に、上述のチベット系首領に官職を授けていく(小林 2011: 26)。すなわち、清朝によって土司制度が敷かれ、これらチベット系首領たちの統括地域は四川や雲南などの諸省に分かれて属することとなった。

シトゥ・パンチェンの第1回麗江行は、このような大きな政治的変化が起こった3年後に実施されたものである。

## 2. テキスト情報

SPとSPSBはいずれも371フォリオである。一点のフォリオは両面印刷されているが、それぞれ印刷されている面を表にして複写され、通し番号が振られている。この通し番号がページ数に相当し、全ページ数は742ページ(742ページ目は白紙)である。またいずれも1から3ページを除いて1ページあたり7行で構成されている。したがって、両者に印刷上の差異は見られないが、SPSBには一部書き足しの文字が見られる。また、両者には複写の濃淡の違いが見られる。具体的にはSPが濃く、SPSBはやや薄い傾向にあるため、異なる判読にならざるを得ない部分が見られる。さらにいずれもオリジナルからの複写であるため、文字の摩滅による判読が困難な部分が見られる。なお、SPSB-Sは洋装本で722ページである。

3テキストとも、冒頭には以下のように『シトゥ・パンチェン自伝』の正式名称が記され

---

<sup>14</sup> ロブザンタンジン反乱に関する論考は、佐藤(1986: 383-423)、加藤(1986)、石濱(1988)を参照されたい。

ている。

tAi si tur 'bod pa karma bstan pa'i nyin byed kyi rang tshul drangs por brjod pa dri  
bral shel gyi me long zhes bya [-]<sup>15</sup> bzhugs so //(ターイシトゥと呼ばれる方はカル  
マ・テンペ・ニンチェーその方であり、[シトゥ・パンチェンの] 真実のありさまにつ  
いて述べられたものを塵一つない瑠璃の鏡と名付けたのであります。)

第1回麗江行の記述部分は、SPとSPSBでは、p.147の5行目後半からp.151の2行目  
までである。SPSB-Sはp.149の13行目半ばからp.150の4行目後半あたりに記述されて  
いる。

以下、テキストの翻刻と訳注を行う。凡例は以下の通りである。

- ・ [-] : 1文字磨滅あるいは欠損
- ・ [-] : 2文字磨滅あるいは欠損
- ・ [-] : 3文字以上磨滅あるいは欠損
- ・ 各テキスト間の異同は脚注に示す。
- ・ ( ) : 日本語訳で補助的説明を加えた部分
- ・ [ ] : 日本語訳で筆者が補った部分
- ・ 各言語をローマ字転写する場合、各々の略記号は、Tib. : チベット語(拡張ワイリー方式)、Dom. : ナシ語(ナシ語文字規則(納西文字方案))、Mon. : モンゴル語(ポップペ方式)とする。但し、チベット語のみの場合は略記号を記さない。
- ・ 語注は脚注に示す。なお、地名や人名の同定に向けた検証については、脚注に示すともにその根拠となる史資料を明示する。また、同定できない地名や人名について、特に脚注でその説明をしない。
- ・ 同定した地名は「4. テキストの訳注」後に掲載した地図にも記した。

地名や人名の同定に向けて、四川民族学院のドルマ・ツェリン('grol ma tshe ring)講師と雲南社会科学院のタムディン・タル(rta mgrin thar)研究員から多くの知見をいただいた。ナシ語の発音や意味は麗江市東巴文化研究所の元研究員の和力民氏と國學院大学の黒澤直道教授から知見をいただいた。また、2018年12月16日の研究成果報告会において、大谷大学白館戒雲名誉教授と同大学三宅伸一郎教授から多くの助言を得た。ここに記して感謝申し上げる。なお、本稿の内容一切の責任は筆者にある。

本稿は平成30～令和6年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)(一般)「ナシ学確立を目指した歴史史料の基盤整備と前近代ナシ族社会経済史の研究」(研究代表者: 山田勅之)の研究成果である。

<sup>15</sup> ba(SPSB-S: 1)。

### 3. テキストの翻刻

(p.147, l.5) cu tA lor chos khrir phebs pa mjal phyag byas / 'jang

(l.6) phyogs su gdan drangs te / bskar<sup>16</sup> gyi thses gcig nyin / rme phur grogs<sup>17</sup> ma tshang du gdan sar phebs / khrom dbang 'ga' re byas / rme nyin / ri spun / ting lhung / mdze<sup>18</sup> 'bam rnams su rim par phebs / di<sup>19</sup> rnams su khrom dbang 'ga' re bgyis / hor phur thog tshang gi brtag zhus la dbyang<sup>20</sup> 'char bltas nas

(l.7) [-]an<sup>21</sup> bskur / sna lcer thon / rag chab dgon du gdan drangs / de nas mgo be mdo nas rim par tshag rag la brgyud 'ba' rog mdor bsdad / drung yig dgon dang / kis thag pa / rog tham pa tshos gdan / 'ba' rong du pyin sde stod smad thams cad kyis gdan / de nas ngar gdong la brgal rim par

(p.148, l.1) snin<sup>22</sup> drug can gyi tshes bdun nying<sup>23</sup> bkra ma<sup>24</sup> gnas nang du drung pas gdan sar phebs / de nas rim par go chen nor bu'i thang du bsdad / mkha' '[-]<sup>25</sup>dang snying dkar sogs kyis mjal / ting mo mdar gur shul bsod nams sogs kyis mjal / bcu bzhir skya bkrar 'byor / kaM po gnas nang dgon dkar sogs

(l.2) gnas mjal byas / gnas sgo bla grwar mkho dbang 'ga' re byas / nyer gcig nyin btegs 'ja' bar gzig rong [--]<sup>26</sup> nas [--]<sup>27</sup>du bsdad / khrom dbang bskur / brag rgyal zhol<sup>28</sup> du bos / rnam gzhang rdzong rtsar yang khrom dbang bgyis / de nas rim bar<sup>29</sup> btegs / mgo nya'i tshes gnyis nyin rag thag gzhis /

(l.3) ka'i rtsar sleb<sup>30</sup> thang si tshe ring gis gzhi len byas / chos 'phel gling par mang ja btang / rma bya dgon pa'i 'khris nas phyag khring<sup>31</sup> lcags rar thang si rgya mtshos gzhi len bas<sup>32</sup> / phyi nyin gzhis dkar bos / thang sir dbang dang khrom dbang byas / de nas rim par klu stag su<sup>33</sup> sleb<sup>34</sup> 'di skab<sup>35</sup> 'bod mi shin tu mang / de nas

<sup>16</sup> tha skar(SPSB-S: 146, 13; SPSB: 147, 6)。

<sup>17</sup> brogs(SPSB: 147, 6)。

<sup>18</sup> mdzes(SPSB-S: 146, 15)。

<sup>19</sup> de(SPSB:147, 6)。

<sup>20</sup> dbyangs(SPSB-S: 146, 16; SPSB: 147, 6)。

<sup>21</sup> lan(SPSB-S: 146, 16; SPSB: 147, 7)。

<sup>22</sup> smin(SPSB-S: 146, 19; SPSB: 148, 1)。

<sup>23</sup> nyin(SPSB-S: 146, 20; SPSB: 148, 1)。

<sup>24</sup> bkram(SPSB-S: 146, 20; SPSB: 148, 1)。

<sup>25</sup> 'gro(SPSB-S: 146, 21; SPSB: 148, 1)。

<sup>26</sup> sogs(SPSB-S: 147, 1; SPSB: 148, 2)。

<sup>27</sup> gal(SPSB-S: 147, 1; SPSB: 148, 2)。

<sup>28</sup> zhal(SPSB-S: 147, 2; SPSB: 148, 2)。

<sup>29</sup> par(SPSB-S: 147, 2)。

<sup>30</sup> slebs(SPSB-S: 147, 3)。

<sup>31</sup> phreng(SPSB-S: 147, 4; SPSB: 148, 3)。

<sup>32</sup> byas(SPSB-2: 147, 5; SPSB: 148, 3)。

<sup>33</sup> tu(SPSB-2: 147, 6)。

<sup>34</sup> slebs(SPSB-S: 147, 6)。

(1.4) rim par phebs sdong po lung du 'byor stor ma rang<sup>36</sup> pa rnams kyis mjal / d[-]<sup>37</sup>  
shod yul stod smad / phyag thabs / 'gong dgon / 'gong smad rnams su rim par sleb<sup>38</sup> /  
sngags pa rnams la lung 'ga' byas / dgra rtsa gnyis ka nas lam ser la brgal ru stod<sup>39</sup>  
'ding dpon sar bsdad / rgyal thang rdzong gi sde pa<sup>40</sup>

(1.5) gsar rnying rnams dang 'phrad / sgrub chen dkar bo dang mjal / kho rtse rgyal ba  
rigs lngar 'byor / gnas mjal mchod pa sogs phul / tsong ye'i mjal rdzong du bsdad / thA'i  
yes mjal / bcu gnyis pa'i tshes gnyis khnag sar mgor bsdad / rdzong du bos nas rgya yis  
gsol ston zhus / de

(1.6) nas 'o nub nas bryud / yang dam 'ding dpon can dang nor bu rab gsal ri khrod dang /  
yang dam gzhis ka rnams su sleb<sup>41</sup> / glang mdo / tsang rwa / skad smad brgyud / zam  
kha 'ban ser gyi<sup>42</sup> gzhi len byas / klu chu mdor bsdad / gru khar 'ur thu ji dang 'u chu  
smad gnyis 'byor / rgyal lam yig zhu<sup>43</sup> bar

(1.7) btang de bar du / bla ma karmas bskul nas rang byung rdo rje<sup>44</sup> phyag chen smon  
'grel rje brgyad pa'i lugs ltar brtsams / lcags khyi gnam lo gsar tshes kyis lha bsangs sogs  
btang / dran thang sangs rgyas kyis bskul nas zhal thang 'ga' re dang / bla ma karmar  
rgyan drug gi zhal thang rnams tshon mdangs bcas bris

(p.149, 1.1) 'di rnams kyang bdag gi rgya<sup>45</sup> thang la cha bshags ba'i<sup>46</sup> gsar spros yin /<sup>47</sup>

(1.4) / zla ba

(1.5) drug pa'i tshes dgur rgyal thang nas ri bo bya rkang mjal bar btegs nas rim par  
phebs / tshes bco lngar la gshis su sleb<sup>48</sup> / 'o rgya bzhi sar bos / zhag mal byas / rgyal  
tshab pa'i yab tshang yin / sa tham mgo sbas su cin tha'i yas bus gzhi len bcas 'og min  
gling du sleb<sup>49</sup>/ de nas mgo sbas thad

(1.6) hwa shang lha khang dang / ho kyin tha'i shyan kung / ban tsang yes mjal ston mo  
dang chang shi gzigs mo gnang / nyer bzhir ri bo bya rkang gi skad<sup>50</sup> bar<sup>51</sup> sleb<sup>52</sup> rnam

<sup>35</sup> tu(SPSB-S: 147, 6)。

<sup>36</sup> rong(SPSB-S: 147, 7; SPSB: 148, 4)。

<sup>37</sup> bu(SPSB-S: 147, 7; SPSB: 148, 4)。

<sup>38</sup> slebs(SPSB-S: 147, 8)。

<sup>39</sup> ru stod の部分を SPSB-S は du ru stod sdod と記載している(SPSB-S: 147, 9)。

<sup>40</sup> sdeng(SPSB: 148, 4)。

<sup>41</sup> slebs(SPSB-S: 147, 14)。

<sup>42</sup> gyis(SPSB-S: 147, 15)。SPSB では gyi の右下に印刷後 s を追記したと思われる SPSB: 148, 6)。

<sup>43</sup> gzhu(SPSB-S: 147, 16)。

<sup>44</sup> rje'i(SPSB-S: 147, 17; SPSB: 148, 7)。

<sup>45</sup> rgyal(SPSB-S: 147, 20)。

<sup>46</sup> pa'i (SPSB-S: 147, 20; SPSB: 149, 1)。

<sup>47</sup> p.149 の 1 行目前半から 3 行目後半にかけては、麗江行の記述から外れて、自身の見聞記述によらない留守中のペルプン寺周辺の事情が記載されているので割愛する。

<sup>48</sup> slebs(SPSB-S: 148, 12)。

<sup>49</sup> slebs(SPSB-S: 148, 14)。

<sup>50</sup> sked(SPSB-S: 148, 16)。

snang lha khang mjal / phyi nyin / span kwang gser sleb<sup>53</sup>/ zla ba brgya par 'ja' gur shar  
sa yin / tin shang dgon pa / sphu tyan / kya shang yin ci /

(1.7) sogs mjal<sup>54</sup> rtse skor byas / 'od sung gi sku gdung bzhugs pa'i brag sgor mchod pa  
dang smon lam btab / kun gyi<sup>55</sup> mthong par<sup>56</sup> 'ja' 'od dkar po shar / nyer dgu'i nyin /  
hwang yang gsi / tA kyo gsi / wi cong gsi rnams brgyud / gsing than gsir bsdad mchod pa  
phul / zla ba bdun pa'i tshes

(p.150, l.1) lnga tA lir slebs thI tu dang mjal / chang shi 'khrab ston mo rgyas par byas /  
gsan tha gsi / yun thang<sup>57</sup> kwan gyin rnams mjal / tshes bdun nyin gsan thong gsi tA  
ming lha khang mjal / shang nyi'u skas su wang pA tsong si bos / tshes bcu gsum la hwa  
chin du 'byor rgyal rigs kyis gzhi len gzabs / de nas mgo sbas lha khang

(1.2) du bsdad / mtshe<sup>58</sup> kha kwan gyin lha khang / phu chos<sup>59</sup> bka' 'gyur lha khang sogs  
su bos / sha ba legs mjad<sup>60</sup> sar bsdad / rgya yi sman sbyor 'ga' re bslab / 'og min gling du  
'byor chos sbyod<sup>61</sup> sogs kyi lung byas / nyer lnga nyin grwa pa brgya skor la bsnyen  
rdzogs bsgrubs / phyi nyin bskang gso tshugs / nyer dgur 'chams dang gtor /

(1.3) rgyag byas / phyi nyin lha bsangs btang / brgyad pa'i tshes gcig nyin mgo sbas su  
sleb<sup>62</sup> / sku rim bka' 'gyur tshugs / phyi nyin bskang gso dang mchams<sup>63</sup> nyung zad  
byas / jin tha yas kyis 'bul gsol btab / sa tham rgyal pos rgya skad du brtsams pa'i sgröl  
ma'i bstod ba bod skad du bsgyur / 'u thu jis bos / tshes lngar la

(1.4) gshis su slebs rgyal rigs can du bsdad / b+ha las gru<sup>64</sup> thon / zam kha / sha ba tsha  
chu / thang mo sga / gnas gsar sgar du sleb<sup>65</sup> / nor bu rab gsal ri khrod du gdan / bcu  
gsum nyin rgyal thang sde pa don grub tshe ring khang par bzhugs / de nas lin tsong  
yes kyi ston mo chang shi dang / can lo'u ye'i ston mo chang shi sogs zhus /

(1.5) go tha'i yas ston mo zhus / ru stod lding<sup>66</sup> dpon sar bsdad / lam ser la brgal dgra  
tsag tsing smad du khrom dbang byas / dgu pa'i tshes gcig la [--]<sup>67</sup> bas<sup>68</sup> gzhi len dang

<sup>51</sup> par(SPSB-S: 148, 16)。

<sup>52</sup> slebs(SPSB-S: 148, 16)。

<sup>53</sup> slebs(SPSB-S: 148, 16)。

<sup>54</sup> mang la(SPSB-S: 148, 17)。

<sup>55</sup> gyis(SPSB-S: 148, 18)。SPSB では gyi の右下に印刷後 s を追記したと思われる(SPSB: 149, 7)。

<sup>56</sup> bar(SPSB-S: 148, 19)。

<sup>57</sup> thad(SPSB-S: 148, 21)。

<sup>58</sup> mtsho(SPSB-S: 149, 1), mcho(SPSB: 150, 2)。

<sup>59</sup> tsho(SPSB-S: 149, 1; SPSB: 150, 2)。

<sup>60</sup> mdzad(SPSB-S: 149, 2; SPSB: 150, 2)。

<sup>61</sup> spyod(SPSB-S: 149, 3; SPSB: 150, 2)。

<sup>62</sup> slebs(SPSB-S: 149, 5)。

<sup>63</sup> 'chams(SPSB-S: 149, 6; SPSB: 150, 3)。

<sup>64</sup> grur(SPSB-S: 149, 8)。

<sup>65</sup> slebs(SPSB-S: 149, 9)。

<sup>66</sup> gding(SPSB-S: 149, 12)。

<sup>67</sup> phos(SPSB-S: 149, 13; SPSB: 150, 5)。

<sup>68</sup> pas(SPSB-S: 149, 13)。

'gong smad du 'byor / sa tham pa rnam sleb<sup>69</sup> / dbang byas / tshes bco lngar 'do ba  
 spang phug [-]<sup>70</sup> 'byor khrom dbang byas / bsnyen rdzogs 'ga' re bsgrubs / de nas  
 (l.6) rim par btegs nyer brgyad la skya bkra gnas nang du slebs / bla grwa rnam la tshe  
 dbang dang / mgon bo'i rjes gnang sogs byas / gnas mjal dang chos 'byung steng du  
 tshogs 'khor dang bsangs mchod bgyis / smin drug can gyi tshes brgyad nyin btegs tsha  
 chu khar bsdad / de nas rim par phebs tshes bcu gsum nyin ar cha  
 (l.7) thus gdan nor can du phyin rjes gnang 'ga' byas / di sa rug<sup>71</sup> dang / du ngos mda' /  
 arb+ha thu / go chen sogs brgyud nas / bkram drung pas gdan sar song nas rjes gnang  
 zhig phul / gleng<sup>72</sup> kha gshis pa rnam kyis mjal / dar gdong la brgyal / tsam rdzong du  
 sleb<sup>73</sup> rdzong dpon gnyis kyis gzhi len byas / dpal 'bar ba rnam  
 (p.151, l.1) sleb<sup>74</sup> khrom dbang byas / de nas 'ba' rog mdo lha khang thang rnam su rim  
 par byor / mgo nya'i tshes gcig nyin mgo tsha'i bla rgan gyis gzhi lan<sup>75</sup> byas / de nas ga  
 'ji<sup>76</sup>la bryud / tshes dgur dpal sprungs su 'byor /

#### 4. テキストの訳注

(p.147, l.5) [トゥム月(khrums zla)<sup>77</sup>の16日] チュ(cu)ターロル(tA lor, 大老爺)<sup>78</sup>が法座

<sup>69</sup> slebs(SPSB-S: 149, 14)。

<sup>70</sup> tu(SPSB-S: 149, 14; SPSB: 150, 5)。

<sup>71</sup> dis ru(SPSB-S: 149, 19; SPSB: 150, 7)。

<sup>72</sup> gling(SPSB-S: 149, 20; SPSB: 150, 7)。

<sup>73</sup> slebs(SPSB-S: 149, 21)。

<sup>74</sup> slebs(SPSB-S: 149, 22)。

<sup>75</sup> len(SPSB-S: 150, 1; SPSB: 151, 1)。

<sup>76</sup> 'je(SPSB-S: 150, 1; SPSB: 151, 1)。

<sup>77</sup> ホル暦(hor zla)の7月16日～8月15日(『藏漢』: 287)。ホル暦とはチベット暦の名称で、『時輪タント

のもとに到着して〔シトゥ・パンチェンに〕拝謁して礼拝し、〔シトゥ・パンチェンを〕ジャン('jang)

(1.6) 地方に招待した。タカル月(SP: bskar, SPSB-S, SPSB: tha skar)<sup>79</sup>の1日、メプ(rme phu)でドクマ(SP: grogs ma, SPSB: brogs ma)氏族の寺に到着した。大勢の人に灌頂などを行った。メニン(me nyin)<sup>80</sup>、リプン(ri spun)<sup>81</sup>、ティンフン(ting lhung)<sup>82</sup>、ゼバム(SP: mdze 'bam, SPSB-S: mdzes 'bam)<sup>83</sup>など順々に行った。それら〔のところで〕、大勢の人に灌頂などを行った。ホルプ(hor phu)<sup>84</sup>でトク(thog)氏族が〔運勢を〕見てほしいと申し込んだことに対して、占いの符号を見て

(1.7) 答を出した。ナチェ(sna lce)<sup>85</sup>に向けて出発した。ラクチャブ(rag chab)<sup>86</sup>寺に招待された。それからゴウエ(mgo be)の分岐点より進んで、ツァクラク(tshag rag)<sup>87</sup>を経て、パロク('ba' rog)<sup>88</sup>の分岐点に〔到着し〕滞在した。トゥンイク(drung yig) 寺<sup>89</sup>やキータク(kis thag)<sup>90</sup>の者、ロクタム(rog tham)<sup>91</sup>の者たちに招待されて、〔その後〕パロン('ba' rong)<sup>92</sup>に行き、上下の集落<sup>93</sup>ともに招待された。それからガルドン(ngar gdong)<sup>94</sup>峠を超えて先に進み、

ラ』の「世間品」で説かれた暦の体系に基づいている(山口 2004: 150)。

<sup>78</sup> ta lor と後に出てくる ta lo ye はともに大老翁の音写であり、清朝の文官に対する敬称と考えられる(Jackson 2009: 270)。このチュ・ターロールという人物の詳細は不明であるが、木(2022)は当時の麗江府知府の馮光裕と見なしている(木 2022: 62)。なお、後に登場する清朝の武官を含めて、敬称の綴りが一定しないことから、初出後もローマ字転写を併記する。

<sup>79</sup> ホル暦の8月16日～9月15日。あるいはホル暦の9月(『蔵漢』: 1132)。

<sup>80</sup> 徳格県達馬郷内のメニン(rme nyin, 美力)を指すと考えられる(『徳格県地名録』: 55)。

<sup>81</sup> 徳格県岳巴郷内の日崩を指す(2019年2月28日: ドルマ・ツェリンより聞き取り)。『徳格県地名録』では徳格県岳巴郷のリギョン(ri gyong, 日炯)と記されている(『徳格県地名録』: 60)。

<sup>82</sup> 白玉県登隆郷を指す(2019年2月28日: ドルマ・ツェリンより聞き取り)。『白玉県地名録』では、白玉県登隆郷のテルルン(gter lhung, 登竜)と記されている(『白玉県地名録』: 58)。

<sup>83</sup> 白玉県灯竜郷内の正邦を指す(2019年2月28日: ドルマ・ツェリンより聞き取り)。『白玉県地名録』では、白玉県贈科郷のチョクバム(pyong 'bam, 雄邦)と記されている(『白玉県地名録』: 55)。

<sup>84</sup> 白玉県の1つの郷を指す(2019年2月28日: ドルマ・ツェリンより聞き取り)。『白玉県地名録』では白玉県河坡郷のホルボ(hor spo, 河坡)と記されている(『白玉県地名録』: 49)。

<sup>85</sup> 拉吉は白玉県熱加郷政府所在地を指す(2019年2月28日: ドルマ・ツェリンより聞き取り)。『白玉県地名録』では、白玉県熱加郷のラトン(lha grong, 拉吉)と記されている(『白玉県地名録』: 52)。

<sup>86</sup> 熱加寺は白玉県熱加郷内のニンマ派の寺院である(2019年2月28日: ドルマ・ツェリンより聞き取り)。『白玉県地名録』では熱加はラクキャブ(rag kyab)と記されている(『白玉県地名録』: 52)。

<sup>87</sup> 白玉県章都郷のツァカ(tshwa kha, 茶卡)を指すと考えられる(『白玉県地名録』: 44)。

<sup>88</sup> パロク('ba' rog, 麻絨郷)は 白玉県麻絨郷麻絨村のことを指す(2019年2月28日: ドルマ・ツェリンより聞き取り)。『白玉県地名録』では、バルロン('bar rong, 麻絨)と記されている(『白玉県地名録』: 46)。

<sup>89</sup> カートク(kaH thog)の分寺で、パロク内の寺である(2019年2月28日: ドルマ・ツェリンより聞き取り, BDRC「重依寺」)。

<sup>90</sup> 白玉県麻絨郷の格塔巴村を指す(2019年2月28日: ドルマ・ツェリンより聞き取り)。『白玉県地名録』では、白玉県麻絨郷のキタル(kyis thar, 格塔)と記されている(『白玉県地名録』: 46)。

<sup>91</sup> 白玉県麻絨郷のロクタム(ro dam, 入当)を指すと考えられる(『白玉県地名録』: 46)。

<sup>92</sup> 脚注 79 と同じ。

<sup>93</sup> 白玉県麻絨郷のバルメートン('bar smad grong, 下麻絨)、バルトゥートン('bar stod grong, 上麻絨)を指すと考えられる(『白玉県地名録』: 46)。

<sup>94</sup> チャル(cha lu, 茶洛)郷の標高 5152m のガドン(nga gdong, 安冬)を指すと考えられる(『巴塘県地名録』: 92)。

(p.148, l.1) ミンドウク月(SP: snyin drug, SPSB, SPSB-S: sming drug)<sup>95</sup>の7日、タマ(bkra ma)<sup>96</sup>のドゥンワ(dung ba)<sup>97</sup>が寺にきた。それから、さらにコチェン(go chen)のノルブ(nor bu)のところに滞在した。カンドゥ(SP: mkha' '[-], SPSB-S, SPSB: mkha' 'grod)とニンカル(snying dkar)などから拝謁を受けた。ティンモダル(tin mo mdar)、クルシュルソナム(gur shul bsod nams)などから拝謁を受けた。14日にキャタ(skya bkra)に到着した。カムポ(kaM po, 崗波格囉)<sup>98</sup>の聖地のグンカル(dgon dkar)などを

(1.2) 巡礼し、ネーゴ(gnas sgo)<sup>99</sup>寺のラマ(bla ma)<sup>100</sup>やタパ(grwa pa)<sup>101</sup>に必要な灌頂などをした。21日に出発して虹を観た。ロン(rong)などからゲル(SP: [-], SPSB-S, SPSB: gal) [へ向いそこで] 滞在した。大勢の人に灌頂をした。タクギェルの(brag rgyal)の下に呼ばれた。ナムジャク(rnam gzhang)ゾン近辺でも大勢の人に灌頂を行なって出発した。ゴ月(mgo nya)<sup>102</sup>の2日にラクタク(rag thag)<sup>103</sup>の荘園

(1.3) 付近に到着し、タンシ(thang si)<sup>104</sup>のツェリン(tshe ring)のお世話になり、チューペルリン(chos 'phel gling)<sup>105</sup>寺の者(僧)にマンジャ(mang ja)を行った<sup>106</sup>。マチャ(rma bya)寺<sup>107</sup>のあたりから手紙<sup>108</sup>をチャクラ(lcags ra)<sup>109</sup>へ [出して]、タンシのギヤムツォ(rgya

<sup>95</sup> ホル暦の9月16日～10月15日(『蔵漢』: 2171)。『蔵漢』の記載を優先してミンドウク(sming drug)と記す。

<sup>96</sup> 音から巴塘県徳達郷内の brag dmar(扎馬)と推測される(『巴塘県地名録』: 85)。

<sup>97</sup> 学位の一種。

<sup>98</sup> カムポは聖山の一つであり、中国語では崗波格囉である(2019年2月28日ドルマ・ツェリンより聞き取り)。『理塘県地名録』では、理塘県格則郷の標高6204mのゲニェン(dge dsnyen, 格囉)と記されて(『理塘県地名録』: 92)。

<sup>99</sup> 理塘県格則郷のネーゴ寺(gnas sgo dgon pa, 冷古寺)を指すと考えられる(『理塘県地名録』: 124)。

<sup>100</sup> 高僧。

<sup>101</sup> 僧侶の総称。

<sup>102</sup> 『蔵漢』の記載を優先してゴ(mgo)と記す。ホル暦の11月。あるいはホル暦の10月16日～11月15日(『蔵漢』: 481)。

<sup>103</sup> 郷城県熱打郷を指す(2019年2月28日ドルマ・ツェリンより聞き取り)。『郷城県地名録』では、郷城県のラタク(rwa rtag, 熱打)と記されている(『郷城県地名録』: 41)。

<sup>104</sup> タンシ(thang si)の位置を確認することはできないが、thangがつく地名がチャテン内で以下のようにいくつか見られる。郷城県熱打郷のタントウー(thang stod, 同堆)(『郷城県地名録』: 41)、郷城県桑披郷のタンダ(thang mda', 同刀)(『郷城県地名録』: 22)、郷城県尼斯郷のタンテングン(thang steng dgon, 同底杠)(『郷城県地名録』: 24)。

<sup>105</sup> チューペルリンは熱打郷の中心に位置する(2023年9月12日ドルマ・ツェリンより聞き取り)。但し管見の限り、工具書の類にチューペルリンの記載は見られない。なお、『郷城県志』に熱打寺という記載が見られるが(『郷城県志』: 383)、熱打郷の住民によれば、熱打寺とはチューペルリンを指すという(2023年9月13日筆者調査)。

<sup>106</sup> 布施として僧侶に茶を賜う行為を意味する。

<sup>107</sup> 馮(2021)は音写と意識を示すのみである。ドルマ・ツェリンによれば、マチャ寺はサムペルリン(bsam 'phel gling)寺の以前の名前であるというが、同寺の僧侶に尋ねても違うという返答であった(2023年9月13日筆者調査)。ただ同寺についてVDSに以下のような説明がある。「チャティン(cha phring)のサムペルリンはカルマ派(kar lugs)のギャチャワ(rgya ja ba)の寺の廢墟を、プン・カンドゥ(dpon mkha' 'grod)が修築したものである(cha phring bsam 'phel gling ni kar lugs rgya ja ba'i dgon ro zhis la dpon mkha' 'grod nyams gsos ngos/)」(VDS: 298)。ギャチャワの詳細は不明ではあるものの、サムペルリン寺の地は麗江の木土土司統治時代、カルマ派の寺院であったが、17世紀中葉にカンドゥの侵攻により、ゲルク派寺院に改変された事情をこれは説明している。したがって、この時に寺院の名称が変更された可能性は高い。なお、17世紀中葉のボンボルガンの動態については山田(2015)を参照されたい。

<sup>108</sup> SPはphyag khringと記載され、SPSB-Sはphyag phrengと記載されている。phyag khringの場合、適当な翻訳が困難であり、またphyag phrengの場合、地名のチャテン(郷城)、あるいは数珠を指すと考え

mtsho)のお世話になった。翌日、ジカル(gzhi dkar)が〔シトゥ・パンチェンを〕呼び、〔シトゥ・パンチェンは〕タンシで大勢の人に灌頂をした。それからさらにルタク(klu stag)<sup>110</sup>に到着した。この時、〔シトゥ・パンチェンを〕招待しようとする人がとても多かった。それから、

(1.4) また出発して、ドンポルン(sdong po lung)<sup>111</sup>に到着し、トルマラン(SP: stor ma rang, SPSB-S, SPSB: stor ma rong)<sup>112</sup>の人々から拝謁を受けた。ウショ(SP: d[-], SPSB-S, SPSB: dbu shod)<sup>113</sup>の上下の地、チャグタブ(phyag thabs)、ゴン('gong)寺<sup>114</sup>、ゴンの下<sup>115</sup>などへ順々に進んだ。密教行者などに口誦にて説いた。タツァ(gra rtse)<sup>116</sup>の荘園からラムセル(lam ser)峠<sup>117</sup>を超え、この上翼のディンブン('ding dpon)<sup>118</sup>のところに滞在した。ギェルタン(rgyal thang)ゾンの

(1.5) 新旧のデパ(sde pa)<sup>119</sup>などと会った。大行者カルポ(dkar po)の拝謁を受けた。コツェ(kho rtse)の大宝寺(rgyal ba rig lnga)<sup>120</sup>のところに到着してお参りし、供物を捧げた。ツォ

られるが、前後の文意が通らない。phyag bris の誤記と仮定すれば、手紙を意味することになり、したがってデルゲのチャクラ(lcags ra)へ手紙を出したと推定される。なお、チャクラの詳細は脚注 101 を参照されたい。

<sup>109</sup> チャクラは徳格県龔巫郷を指す(2019年2月28日ドルマ・ツェリンより聞き取り)。『徳格県地名録』では、徳格県のチャクラ(lcags ra, 龔巫)と記されている(『徳格県地名録』: 42)。

<sup>110</sup> 郷城県のルタク klu lttag(黒達)と考えられる(『郷城県地名録』: 34)。

<sup>111</sup> gdong po lung はドンポの谷という意味である。一方、チャテン内にドンスム(gdong gsum, 洞松)という町があり、当該地に3本の大きな谷が合流するところから名付けられたという(『郷城県地名録』: 38)。したがって、ドンポルンはドンスムの別称かその近辺と考えられる。

<sup>112</sup> 香格里拉市のトルワロン(gtor ba rong, 東旺)と考えられる(『中甸県地名志』: 23)。

<sup>113</sup> 翁水を指す(2019年3月4日タムディン・タルより聞き取り)。『中甸県地名志』では、香格里拉市翁水郷のゴシュー(sngo shod, 翁水)と記されている(『中甸県地名志』: 36)。翁水で掲げられていた看板3点を確認したところ、以下のような記載が見られた。まず、「格咱郷翁水村人大代表聯絡室(漢字併記)」には wung hrung とチベット語表記がなされていたが、これは翁水の中国語の発音の音写であろう。「翁水批発部(漢字併記)」には dbu shod というチベット語表記が見られ、SP 記載通りの綴りである。また「翁水悟金趣靈歡迎您(漢字併記)」には dbang shod というチベット語表記が見られた(2019年8月13日筆者調査)。

<sup>114</sup> gor(翁上)を指す(2019年3月4日タムディン・タルより聞き取り)。『中甸県地名志』では、香格里拉市翁上郷のゴル(gor, 翁上)と記されている(『中甸県地名志』: 45)。

<sup>115</sup> 香格里拉市浪都郷の翁上の下手を指す(2019年3月4日タムディン・タルより聞き取り)。

<sup>116</sup> タムディン・タルによれば、ゾンツァ(dzong rtse, 宗咱)を指すという(2019年3月4日タムディン・タルより聞き取り)。筆者は香格里拉市格咱郷のケーツァク(skad tshag, 格咱)と推測する(『中甸県地名志』: 46)。ゾンツァはシャングリラ市の東辺に位置し、ゴル(翁上)からギェルタンに向かうには、かなり不自然なルート取りになるが、ケーツァグは翁上からギェルタンへ向かう最も自然なルート上に位置している。したがって、音の違いがややあるものの、ケーツァグ(格咱)を指す可能性が高いと考えられる。

<sup>117</sup> 浪司腊卡を指す(2019年3月4日タムディン・タルより確認)。『中甸県地名志』では、格咱郷内の標高3858mのラムサルラカ(lam gsar la kha, 浪司腊卡)と記されている(『中甸県地名志』: 196)。

<sup>118</sup> ディン(lding)は兵員編成の単位。25人単位とする。ディンブンは村長、頭人である。

<sup>119</sup> 首領を意味する。

<sup>120</sup> rigs lnga gling(大宝寺)(『蔵区漢蔵対照』: 613)。また、筆者は現地寺の看板に gnas chen rgyal ba rig lnga と表記されているのを確認した。但し、コツェの具体的な場所は不明である。なお、このあたりの村名として紅坡村と記載された看板を確認したが、併記のチベット語は hung bdu と表記されていた。つまり、紅坡の中国語の発音の音写であろう(2018年8月18日筆者調査)。Jackson(2009)は、Rock(1947)に基づいてコツェを格咱とし、かつ大宝寺の所在地としているが、香格里拉市内から大宝寺までの距離や方位が適当ではないように思われる(Jackson 2009: 235)。また木(2022)もコツェを格咱としているが、参照史料を示していない。なお同寺は1660年、麗江土司の木増が施主となり、チューインドルジェ(chos dbying rdo rje)によって建立された。その後1674年にゲルク(dege lugs)派へ改宗された(『中甸県志』: 233)。

ンイエ(rtsong yes, 総爺)<sup>121</sup>の拝謁を受け、ゾンに滞在した。ターイエ(thA yes, 大爺)<sup>122</sup>の拝謁を受けた。12月2日、カンサルゴ(khang sar mgo)<sup>123</sup>に滞在した。ゾンに呼ばれ、漢人が宴を催したいとお願い申し上げた。それ

(1.6) から、オヌブ('o nub)<sup>124</sup>を通して、ヤンタム(yang dam, 小中甸)<sup>125</sup>のディンブンたち〔のところ〕とノルブラブセル(nor bu rab gsal)の山中の小寺、ヤンタムの荘園などを訪れた。ランド(glang mdo)<sup>126</sup>、ツァンラ(tsang rwa)<sup>127</sup>、ケーの下(skad smad)を通して、ザムカ(zam kha)<sup>128</sup>のベンセル('ban ser)<sup>129</sup>の世話になった。ル(klu)<sup>130</sup>川が合流するところで滞在した。渡し場へウトウジ('u thu ji)とウチュメー('u cu smad)の2人が来た。中国〔へ入る〕通行証を

(1.7) お願いするために〔人を〕送り、その間、ラマ・カルマパ<sup>131</sup>に促されて、ランチュン・ドルジェ(rang byung rdo rje)の『マハームドラーの祈願』<sup>132</sup>の注釈を尊者8世の仕方のよう  
に書いた<sup>133</sup>。鉄・犬の新年(1730年)〔一〕日のラサン(焼香)などを施した。テンタン(dran

<sup>121</sup> ツォンイエー(rtsong yes)は総爺の音写で、清朝の地方駐在武官職に対する敬称と考えられる(Jackson2009: 238)。ゲェルタンに武營が設けられたのは、雍正6(1728)年である。光緒『新修中甸序志書』には、以下のように記されている。「分設中甸營守備一員、千総一員、把総二員...」(光緒『新修中甸序志書』中巻、兵制志)。これらのうち、総兵や千総、把総などの「総」と敬称である「爺」をあわせた単語が一般に通行していたと推測される。

<sup>122</sup> 清朝の文官に対する敬称と考えられる(Jackson2004: 270)。ゲェルタンへ清朝の文官が駐在することになるのは、1724(雍正2)年である(「雍正2年帰版設治移劍川州州判分駐中甸」(民国『中甸県志稿』首巻、大事記))。

<sup>123</sup> 筆者はゲェルタンの北側の集落で、チベット語で khams ser、漢字では康司または康斯と表記された看板を確認した(2018年8月18日筆者調査)。『中甸県地名志』では、香格里拉市諾西郷のカンサル(khang gsar, 康司)と記されている(『中甸県地名志』: 79)。

<sup>124</sup> 香格里拉市尼史郷の'obs nub(吳努)と考えられる(『中甸県地名志』: 87)。現地の表記は尼市村吾努または吾怒である(2018年8月18日筆者調査)。

<sup>125</sup> yang thang(小中甸)(『蔵語人名地名』: 328, 341)。

<sup>126</sup> 香格里拉市和平郷のライムド(la'i mdo, 冷都)と考えられる(『中甸県地名志』: 101)。現地で掲げられていた看板2点を確認したところ、以下のような記載が見られた。まず「中国共産党小中甸鎮和平村林都党支部委員会(漢字併記)」のチベット語併記部分に la'i mdo(林都)の記載が確認された。また「冷都坡隧道出口」という看板を確認したが、チベット語併記はなかった(2019年8月19日筆者調査)。

<sup>127</sup> 香格里拉市団結郷のツァリ(rtswa ri, 佐日)と推測される(『中甸県地名志』: 105)。

<sup>128</sup> ザムカは橋を意味する。橋が架けられている地を中国語で橋頭と名付けることがあり、地図5の範囲に限っていても、いくつか見られる。ここで言うザムカとは、麗江から香格里拉市へ向かう現在の国道214号線上にある橋頭と推測される。Rock(1947)によれば、ここに中江河に架かる木橋があり、住人は全てナシ族であったという(Rock1947: 256)。

<sup>129</sup> SP以下のような記述がある。「ナシ語でベンセル('ban ser)とはチベット語のトンブン(grong dpon)である('jang skad 'ban ser / bod skad grong dpon yin /)」(SP: 184)。ベンセルはナシ語の音写であり、その意味はチベット語のトンブン、すなわち村長を意味する。なお、ナシ語ではベスウエ(Dom. bbeisui)である。

<sup>130</sup> 馮(2021)は現在の麗江市玉龍県内金沙江南岸としているが、典拠は示されていない。

<sup>131</sup> Jackson(2009)はラマ・カルマパを同行していたシトゥの弟と解釈している(Jackson2009: 235)。

<sup>132</sup> ランチュン・ドルジェは転生ラマ制度を案出したラマである。彼の前に2人のカルマパがすでに存在していたとみなされたので、ランチュン・ドルジェはカルマパ1世ではなく3世と認識されている。また『マハームドラーの祈願』(nges don phyag rgya chen po'i smon lam)は彼の著作の一つである(Douglas and White1976: 48)。なお、マハームドラーとはインド密教において真理の姿、具体的な形を意味する語で、性瑜伽を含む身体的ヨーガ、あるいは性瑜伽の女性パートナーを指す。チベットに入ってからカギユ派の中心教義として発展した。日本語では大印契と訳される。

<sup>133</sup> シトゥ・パンチェンを認定し、また師であるシャマルパ8世ペルチェン・チューキ・トゥンドゥブを指すと推定される。他方、カルマパ8世を指す可能性もあり、その場合はミキユ・ドルジェ(mi bskyod rdo rje)

thang)のサンギェ(sangs rgyas) に促されて、何枚かの肖像画とラマ・カルマパのために六  
 莊嚴(rgyan drug)<sup>134</sup>の肖像画などを色をつけて描いた。

(p.149, l.1) これらも私のギェルタンを頼りとする先例となったのである。

<sup>135</sup>(l.4)6月

(l.5) 6日にギェルタン(SPSB: rgyal thang)より、鶏足山(ri bo bya rkang)をお参りにする  
 ために出発して、〔以下の通り〕順々に到着した。15日にラシ(Tib. lag shis, Dom. lasheel,  
 拉市)<sup>136</sup>に到着した。オギャジ(o rgya bzhi)のところに呼ばれて宿営した。〔ここは〕ギェル  
 ツァップ(rgyal tshab)<sup>137</sup>の生家であった。サタム(sa tham)のゴバー(Tib. mgo sbas, Dom.  
 gguqbbei, 大研鎮)<sup>138</sup>で、チン(cin, 斬)タイイエ(thai' yas, 大爺)<sup>139</sup>に呼ばれてお世話になり、  
 〔その後〕オクミンリン('og min gling, 福国寺)<sup>140</sup>に到着した。それからゴバーのところの  
 (l.6) ハシャン・ラカン(hwa shang ha khang)<sup>141</sup>とホキン(ho kyin, 鶴慶)<sup>142</sup>のタイシェンク  
 ン(thai shyan kung, 太玄宮)<sup>143</sup>、ペン(ban)ツァンイエー(tsang yes, 総爺)<sup>144</sup>のところに  
 順々に参り、〔ペンツァンイエーが〕宴を開き観劇を執り行なった。24日に鶏足山の中腹に  
 到着し、ナムナン・ラカン(rnam snang lha khang, 毘盧閣)<sup>145</sup>をお参りした。翌日、ペン

---

である。なお、ミキュ・ドルジェはマハームドラーに関する著作を多数残している(Douglas and White 1976: 77)。

<sup>134</sup> 龍樹(ナーガールジュナ)、聖提婆(アーリヤデーバ)、無著(アサンガ)、世親(ヴァスヴァンドゥ)、陳那(デ  
 イグナーガ)、法称(ダルマキールティ)の6名を指す。

<sup>135</sup> p.149の1行目前半から3行目後半にかけては、麗江行の記述から外れて、自身の見聞の記述によらな  
 い留守中のペルプン寺周辺の事情が記載されているので割愛する。

<sup>136</sup> 音から拉市(Dom. lasheel)と推測される(『納西地名』: 81)。また、拉市はギェルタン方面から麗江への  
 街道上に位置する。

<sup>137</sup> ギェルツァップ6世ノルプザンポ(nor bu bzang po)を指すと考えられる(Jackson 2009: 270)。ギェルツ  
 ァップはカルマ派の化身ラマの名跡の一つである。なお、Douglas & White (1976)は、ノルプザンポはジャ  
 ン地域のギェルタンに生まれたとしている(Douglas & White 1976: 165)。

<sup>138</sup> Jackson(2009)はRock(1947)の記述からやはり大研鎮としている(Jackson 2009: 270)。なお、Rock  
 (1947)ではNgu-bäは麗江盆地の人々から麗江の町を指すと記録している(Rock 1947: 172)。

<sup>139</sup> Jackson(2009)は『麗江府志略』の記述を基に斬治岐としている。thai' yas, は敬称を示す大爺の音写で  
 あろう(Jackson 2009: 235)。なお、斬治岐は鑲黃旗人で、1729(雍正7)年、麗江知府に任命された(乾隆『麗  
 江府志略』官師略)。

<sup>140</sup> Rock (1947)はオクミンナムリン(og min rnam gling)と記録している。漢名は福国寺である  
 (Rock 1947: 205)。また乾隆『麗江府志略』には、以下のような記述が見られる。「在城西北白沙里芝山上。  
 旧名解脱林、明熹宗賜名福国寺。」(乾隆『麗江府志略』礼俗略)。

<sup>141</sup> hwa shang は和尚の音写である。その堂であることから、漢地仏教の堂と考えられる。また、光緒『麗  
 江府志』に大研鎮内の仏教施設として以下のような記述が見られる。「皈依堂、在府城西木土司署左、明隆  
 慶三年建、内供三聖観音。今改為華蔵都。」(光緒『麗江府志』卷四祠祀志、寺観)。

<sup>142</sup> 音からホキン(ho kyin)は鶴慶と推測される。また鶴慶は麗江から鶏足山へ向かう街道上に位置する。

<sup>143</sup> タイシェンクン(thai shyan kung)は音から鶴慶の太玄宮と推測される。また、太玄宮について以下の  
 ような記録が見られる。「在城東。明隆慶丁卯年、知府周贊、麗江府土官木高建、規制宏敞。康熙辛巳年、  
 総兵劉廷傑重修新添亭台樹木藻檜可觀為州境宮觀之最。」(光緒『鶴慶州志』卷六、寺観、7a)。なお、太玄  
 宮は現存しない(2018年8月12日筆者調査)。

<sup>144</sup> 鶴慶では以下のような兵制であった。「鶴麗鎮総兵一員駐劄本府。左右遊撃二員、守備二員、千総四員、  
 把総八員、馬戦兵二百四十名、歩戦兵九百六十名、守兵一千二百名。」(康熙『鶴慶府志』卷十四、兵防)。  
 なお、光緒『鶴慶州志』において、1730年当時、総兵や千総、把総を務めた者の中で、banの音に相当す  
 る人名の記載は見当たらない。

<sup>145</sup> ナムナン(rnam snang)とは毘盧遮那仏である。その堂であることから毘盧閣を指すと考えられる。な

クァンセ(span kwang gse, 放光寺)<sup>146</sup>に到着した。8月に虹がかかるところにいるだろう。ティンシャン(tin shang)寺<sup>147</sup>、プチェン(sphu tyan)<sup>148</sup>、キャシャンインチ(kya shang yin ci)<sup>149</sup>

(l.7) などをお参りした。山の頂きを廻って巡礼した。迦葉の御体のお骨を安置している岩の門<sup>150</sup>を供養し、祈願を捧げた。普く見える白い虹の光が出現した。29日に、ハンヤン寺(hwang yang gsi, 華嚴寺)<sup>151</sup>、ターキョシ(tA kyo gsi, 大覚寺)<sup>152</sup>、ウィチョンシ(wi cong gsi, 石鐘寺)<sup>153</sup>などを通して、シンテンシ(gsing than gsi, 悉檀寺)<sup>154</sup>に滞在して供養した。7月5日

(p.150, l.1) に大理(tA li)<sup>155</sup>に到着し、ティートゥ(thI tu, 提督)<sup>156</sup>とお会いして、[ティートゥが] 観劇と宴会を盛大に催した。センタシ(gsan tha gsi, 三塔寺)、ユンタン(yun thang, 雨銅)の観音(kwan yin)などをお参りした<sup>157</sup>。7日にセントンシ(san thong gsi)、ターミン(tA ming)・ラカンをお参りした。シャンニウケー(shang nyi'u kas, 上牛街)<sup>158</sup>でワン(wang)

お、『鶏足山志』には以下のような記述が見られる。「在祝国寺西背靠青檀山右去半里許接華嚴寺。万曆庚戌僧如交募王麟勸建。」(『鶏足山志』卷四、寺院上、毘盧閣、26b)。

<sup>146</sup> 音から放光寺と推測される。『鶏足山志』には以下のような記述が見られる。「在瓊樓山下倚壁參天面山橫案適当鷄山之胸臆。嘉靖丙午僧円偈同李元陽創建。……〔万曆〕戊戌年勅頒藏經後有藏經閣久已傾頽。……康熙辛亥灾万寿庵、僧文波募順寧知府楊□□重建藏經閣。」(『鶏足山志』卷四、寺院上、放光寺、6a)。

<sup>147</sup> 木(2022)は迎祥寺とみなしている(木 2022: 63)。なお、『鶏足山志』には以下のような記載が見られる「康熙丙午僧普宜広富重修。」(『鶏足山志』卷四、寺院上、迎祥寺、9b)。

<sup>148</sup> 馮(2021)は普賢寺とみなしている(馮 2021: 39)。「鶏足山志」には普賢寺という記載はないが、普賢閣に関する記載が以下の通り見られる。「在大悲閣之上、万曆年建今廢。」(『鶏足山志』(卷四、寺院上、普賢閣、28b)。すなわち、シトゥ・パンチェンが訪れたところには普賢閣はすでに廢墟であり、ここを訪れた可能性はほぼないと考えられる。また、木(2022)は普祥寺とみなしているが、『鶏足山志』にその記載が見られない。

<sup>149</sup> 木(2022)は吉祥之祠とみなしている(木 2022: 63)、『鶏足山志』にその記載が見られない。

<sup>150</sup> 華首門と考えられる。『鶏足山志』に迦葉が入滅した地であると記されている(「華首門在四觀峯南側、巖如平劈高数百尺且数倍、巖壁有痕内剝厥状如門双闕宛然上、簷飛突丈余周廻隆起圓扉对掩中裂一隙、其門左右各三丈三寸高倍之、所謂迦葉奉仏金縷衣入定处也。」(『鶏足山志』卷二、山水、華首門、14a-b)。また、記述の通り、岩の門のような自然の構造物が見られる(2019年8月25日筆者調査)。

<sup>151</sup> 音から華嚴寺と推測される。なお、『鶏足山志』には以下のような記述が見られる。「在鷄足中峯之中。…嘉靖間僧真円建庵後、…」(『鶏足山志』卷四、寺院上、華嚴寺 4b)。

<sup>152</sup> 音から大覚寺と推測される。なお、『鶏足山志』には以下のような記述が見られる。「在紫雲山前万寿庵之上、…万曆初年寂光寺僧儒全同洱城楊宗堯建一小庵。」(『鶏足山志』卷四、寺院上、大覚寺 5a-b)。

<sup>153</sup> 音から石鐘寺と推測される。なお、『鶏足山志』には以下のような記述が見られる。「在仙鶴山下、…寺創自唐時。」(『鶏足山志』卷四、寺院上、石鐘寺 3a-b)。

<sup>154</sup> 音から悉曇寺と推測される。「万曆丁巳麗江府土知府・木増延僧积禪建。天啓四年勅頒藏經、賜額祝国悉檀禪寺。崇禎己巳、建法雲閣貯之。至辛未年、其子木懿重加丹堊宏麗精整、遂为一山之冠。辛巳年、僧道源往朝會陀、又請嘉典府藏經一部、鼎貯奉大殿中。」(『鶏足山志』卷四、寺院上、悉檀寺、5b-6a)。李(2003)は悉曇寺の現状と関連する石碑について報告している(李 2003: 47-48)。筆者が2017年に調査した際、草木が生い茂り、小さな看板がその存在を示すに過ぎない状態であった(2017年8月14日筆者調査)。

<sup>155</sup> Jackson(2009)は大理と判断している(Jackson2009: 271)。

<sup>156</sup> Jackson(2009)は提督と判断している(Jackson2009: 271)。なお、提督府の所在地について以下のような記述が見られる。「提督府在大理府南門内、即分巡道旧署」(康熙『雲南通志』卷十五、秩官、58b)。

<sup>157</sup> 『徐霞客游記』に以下のような記載が見られる。「是寺在第十峰之下、唐開元中建、名崇聖寺、前三塔鼎立、而中塔最高、形方、累十二層、故今名為三塔。塔四旁皆高松参天。其西由山門而入有鐘樓与三塔对、勢極雄壯、而四壁已頽、檐瓦半脱、已岌岌矣。……其後為雨珠觀音殿、乃立像、鑄銅而成者、高三丈。鑄時分三節為范、肩以下先鑄就而銅已完、忽天雨銅如珠、衆共掬而熔之、恰成其首、故有此名。」(『徐霞客游記』卷八上)。なお、雨銅觀音は現存しない(方 1978, 2017年8月筆者調査)。

<sup>158</sup> 母音の後ろの後添字 s を i と発音する場合がある。また、街は標準中国語では jie と発音するが、雲南

バーツォンシ(bA tsonḡ si, 把総司)<sup>159</sup>に招待された。13日にハチン(hwa chin)に到着し、王族たちが場所を設けて大変歓待してくれた<sup>160</sup>。それから、ゴペーの仏堂(1.2)に滞在した。ツェカ(SP: mtshe kha, SPSB: mcho kha)<sup>161</sup>の観音堂(kwan gyin lha khang)、プチュ(Tib. phu chos, Dom. pvlciuqwe, 普濟)のカンギュル・ラカン(bka' 'gyur lha khang)<sup>162</sup>などに呼ばれた。シャワ(Tib. sha ba, Dom. shalwe, 東河)のレクゼー(SP: legs mḡad, SPSB-S: legs mdḡad)のところに滞在した。中国の薬の処方をつくろ学んだ。オクミンリンに到着して、経典を念じた。25日にタパおよそ100人に具足戒を与えた。翌日、現生利益を祈願する儀式を執り行った。29日にチャム(chams)とトル

(1.3) ギャク(gtor rḡayḡ)<sup>163</sup>を行なった。翌日サンを焚いた。8月1日にゴペーに行った。仏事を行い、カンギュルを読む儀式を始めた。翌日、現生利益を祈願する儀式とチャムを少しだけ行った。ジンタイエ(jin tha yas, 靳大爺)<sup>164</sup>が供物を献じた。サタム王が中国語で書いた『ターラーの偈頌』(sgrol ma'i bstod ba)をチベット語に訳した<sup>165</sup>。ウトウジ(u thu

---

方言では「カイ」と聞こえる。したがって、nyi'u kas は牛街と考えられる。また、shang を「上」の音とみなせるなら、牛街の上手の村と推測される。なお、牛街は観音山の山中にあり、牛の日に市が立ったことから名づけられたという(『洱源県志』: 38)。現在の行政区分は洱源县牛街郷である。

<sup>159</sup> 音から把総司と考えられる。司はここでは役人または衙門を意味すると考えられる。また wang は人名と考えられる。観音山に把総が置かれるのは光緒元(1875)年だが、以前より軍は駐屯していた。年代不詳ではあるが、光緒『鶴慶州志』に観音山土巡檢に王印兆という者の名が見える。土巡檢であるので、現地の非漢族の首領の一人が武官職を授けられたのであろう(光緒『鶴慶州志』卷二十、秩官、22a)。他方、把総ではなく巡檢と記載されているが、チベット人が、武官の職名の詳細を必ずしも把握していたわけではないと推測できるなら、武官を把総と総称していた可能性があるかと推測される。

<sup>160</sup> 馮(2021)と木(2022)では、鶴慶と同定しているが、前述の ho kyin との音の違いを検討しているわけではない。また、シトゥ・パンチェンが牛街を通過していることを考慮しているわけではない(馮 2021: 40, 木 2022: 64)。筆者は以下のように考える。シトゥ・パンチェンが麗江を訪れた当時、すでに木氏は麗江土司の職を剥奪されてはいたが、下位の職位とはいえ、土通判という職を引き続き清朝から与えられており(乾隆『麗江府志略』官師略)、一定の勢力を依然として有していたと考えられる。したがって、シトゥ・パンチェンは引き続き木氏一族を王族とみなしていたと推測される。そこから、ここで言う王族とは木氏一族と考えられる。その王族が外向いて歓待していることから、ハチンは麗江の域外ではなく、その南郊と推定する。なお、この時の木氏当主は木徳(1714~1777)である(『木氏宦譜』: 147)。

<sup>161</sup> Rock(1947)では白沙鎮内の村にナシ語で Ndz(ěr)-gkan-ndz(ěr)-k'ö という村があると記録されている(Rock: 1947: 212)。なお、ナシ語文字規則(納西文字方案)では zzergai zzerkee(『納西地名』: 146)である。仮にこの村が当該の村だとすると、現在の村は白沙の中心から北方の豊樂村であるという(2023年8月10日和田民氏より聞き取り)。なお、白沙の観音堂には以下のような記載が見られる。「観音堂、在城北二十里白沙里。」(乾隆『麗江府志略』礼俗略)。また、麗江古城内の観音堂について、以下のような記載が見られる。「観音閣、在城南門外万鈞橋東。」(乾隆『麗江府志略』礼俗略)。

<sup>162</sup> 普濟村にはかつて村廟があり、そこに麗江版カンギュルが収蔵されていたという。中華人民共和国成立後まもなくして、村廟は取り壊されて跡地には小学校が建てられ、麗江版カンギュル自体は普濟寺へ移された。しかしながら、文化大革命時に大部分が焼失し、一部が普濟寺に収蔵されているという(石 2023: 8, 2023年9月11日普濟村にて筆者聞き取り)。以上から、プチュのカンギュル・ラカンは普濟村の村廟を指すと考えられる。

<sup>163</sup> チャムは舞踊を意味する。トルギャクは儀式が終わると火の中にトルマと呼ばれるバターで作られた供物を投げ込む行為で、一種の厄払いの儀式である。

<sup>164</sup> 前述の靳大爺とはチベット語の表記が異なるが、表記のゆれの類とみなして差支えないと考えられる。

<sup>165</sup> SPSB(d)に以下のような記述が見られる。「ジャン・サタムの法王、ソナム・ラプテン(bsod nams rab brtan)がお書きになられて、シトゥがリキャンフ(li kyang hu, 麗江府)の地で中国の本からチベットの言葉に翻訳したものである(j'ang sa tham chos kyi rgyal po bsod nams rab brtan gyis mdḡad pa ste / si tu pas li kyang hu'i yul du rgya'i dpe las bod skad du bsgyur ba'o//)。」(SPSB(d): 443)。ジャン・サタムの法王とは麗江土司を指し、ソナム・ラプテンとはその当時の麗江土司であった木増(1587~1646)のチベット名である。チベット語文献では麗江土司をジャン・ギェルポ(j'ang rgyal po)、サタム・ギェルポ(sa dam

ji)の招請を受けた。5日にラ

(1.4) シ(Tib. la gshis, Dom. lasheel, 拉市)に到着し、王族とともに滞在した。バレー(b+ha las)<sup>166</sup>の渡し船に乗って出発した。サムカ、シャプツァ(shab tsha)川<sup>167</sup>、タンモガ(thang mo sga)<sup>168</sup>、新しい聖地の宿営地に順々に到着した。ノルブラプセル(nor bu rab gsal)という山中の小寺に招かれた。13日にギェルタンのデパであるドウトゥプツェリン(don grub tshe ring)の家に滞在した。それから、リン(lin)ツォンイエー(tshong yes, 総爺)からの宴と観劇〔の招待〕と、チェン(can)ロウイエ(lo'u yes, 老爺)からの宴と観劇〔の招待〕を受けた。

(1.5) コ(go)タイイエー(ta'i yas, 大爺)が宴〔に招待したいと〕申した。〔ギェルタンの〕上翼のディンブンのところに滞在した。ラムセル峠を超えて、ダツァクのツィンメー(SP: rtsing smad, SPSB-S: tsing smad)で大勢の人に灌頂をした。9月1日にポワ(pho ba)の人のお世話になり、ゴンの下に到着した。サタムの人々が到着し、〔シトゥ・パンチェンが〕灌頂をした。15日にドワ('do ba)<sup>169</sup>のパンブク(spang phug)<sup>170</sup>に到着して、大勢の人に灌頂をし、比丘戒を授けた。それから

(1.6) さらに進んで、28日にキャタ(skya bkra)に到着した。ラマヤタパに長寿灌頂をした。マハーカーラ<sup>171</sup>の許可灌頂を行った。巡礼をして、法基の上でガナ曼荼羅(tshogs 'khor)<sup>172</sup>とサンチュー(bsangs mchod)<sup>173</sup>を執り行った。ミンドウク月の8日に出て、ツァ(tsha)川の河岸に滞在した。それから引き続き進み、13日にアルチャ

(1.7) トゥ(ar cha thus)の宝座あるところへ行って、いくつかの許可灌頂を施した。ディサルク(di sa rug)、ドゥグダー(du ngos mda')、アルバトゥ(a rb+ha thu)、コチェン(go chen)などを經由して、タム(bkram)<sup>174</sup>のダウンワが大きな寺へ行って、許可灌頂などを施し差し上げた。レンカシ(SP: gleng kha gshis, SPSB-S, SPSB: gling kha gshis)<sup>175</sup>の人々から拝謁

rgyal po)、あるいはジャン・サタム・ギェルポ(jang sa dam rgyal po)と記載されており(山田 2011)、直訳すれば麗江王である。

<sup>166</sup> 音から現在の巴落と考えられる。Rock(1947)ではBa-lo(巴羅)と音写され、そこでは3艘の船が金沙江対岸の石鼓の間を往復していたという(Rock1947: 278)。

<sup>167</sup> 音から shwa rgyab chu(刹覚曲)と推測される。小中甸内を北から南へ流れる。長さ7キロ(『中甸県地名志』: 196)。

<sup>168</sup> 音が近い地名を2つ挙げておく。香格里拉市小中甸聯合郷のタンボクゴ(thang 'bog mgo, 塘布谷)とタンギェンガン(tang rgyan sgang, 塘安各)(『中甸県地名志』: 94)。

<sup>169</sup> 稻城('dab pa)を指す(2019年2月28日ドルマ・ツェリンより聞き取り)。『稻城県地名録』では、ダブパ('dab pa, 稻城)記されている(『稻城県地名録』: 28)。

<sup>170</sup> 稻城県桑堆郷のパンブク寺(spang phu dgon, 奔波寺)を指すと考えられる(『稻城県地名録』: 107)。なお、パンブク寺はカルマ派寺院である(『稻城県志』: 82)。

<sup>171</sup> マハーカーラは元来ヒンドゥー教の神の一種である。チベットに入って仏教守護の善神に転じて護法尊に位置づけられた(立川・頼富 1999: 179)。なお、マハーカーラは日本では大黒天と称される。

<sup>172</sup> tshogs kyi 'khor lo とは、サンスクリット語のガナチャクラ(gaṇacakra)あるいはガナ曼荼羅(gaṇamandala)のチベット語訳である。ガナチャクラとは、金剛乗の信解者にして已灌頂者たちが定期的に行う集会であり、「酒と肉と性瑜伽」を不可欠な構成要素とする「タントラの饗宴」である(静 2009: 488)。他方、ガナ曼荼羅とは特定の理念として存在する曼荼羅通り、男女瑜伽者で構成される生身の曼荼羅である。あるいは導師である金剛阿闍梨と弟子によって共有されている共同観念の曼荼羅である(静 2002: 76)。

<sup>173</sup> 焚き上げの儀礼。

<sup>174</sup> bkra ma(脚注 87)との綴り違いで同一の場所を指すと考えられる。

<sup>175</sup> 現在のツォラ(mtso la)の旧称(『巴塘県地名録』: 76,79, 『蔵語人名地名』: 180)。

を受けた。ダルドン(dar gdong)<sup>176</sup>峠を通過して、ツァム(tsam)・ゾン<sup>177</sup>に到着して、2人のゾンブン(rdzong dpon)<sup>178</sup>のお世話になった。ペルバル(dpal 'bar)<sup>179</sup>の人たちが(p.151, l.1)到着して、[シトゥ・パンチェンは] 大勢の人に灌頂をした。それからバログの分岐点、ラカンタン(lha khang thang)<sup>180</sup>などに続いて到着した。ゴの月の1日にゴツァ(mgo tsha)の老僧のお世話になった。それから、カジ(SP: ga 'ji, SPBS, SPBS-S: ga je)を通過して、9日にペルブンに到着した。

---

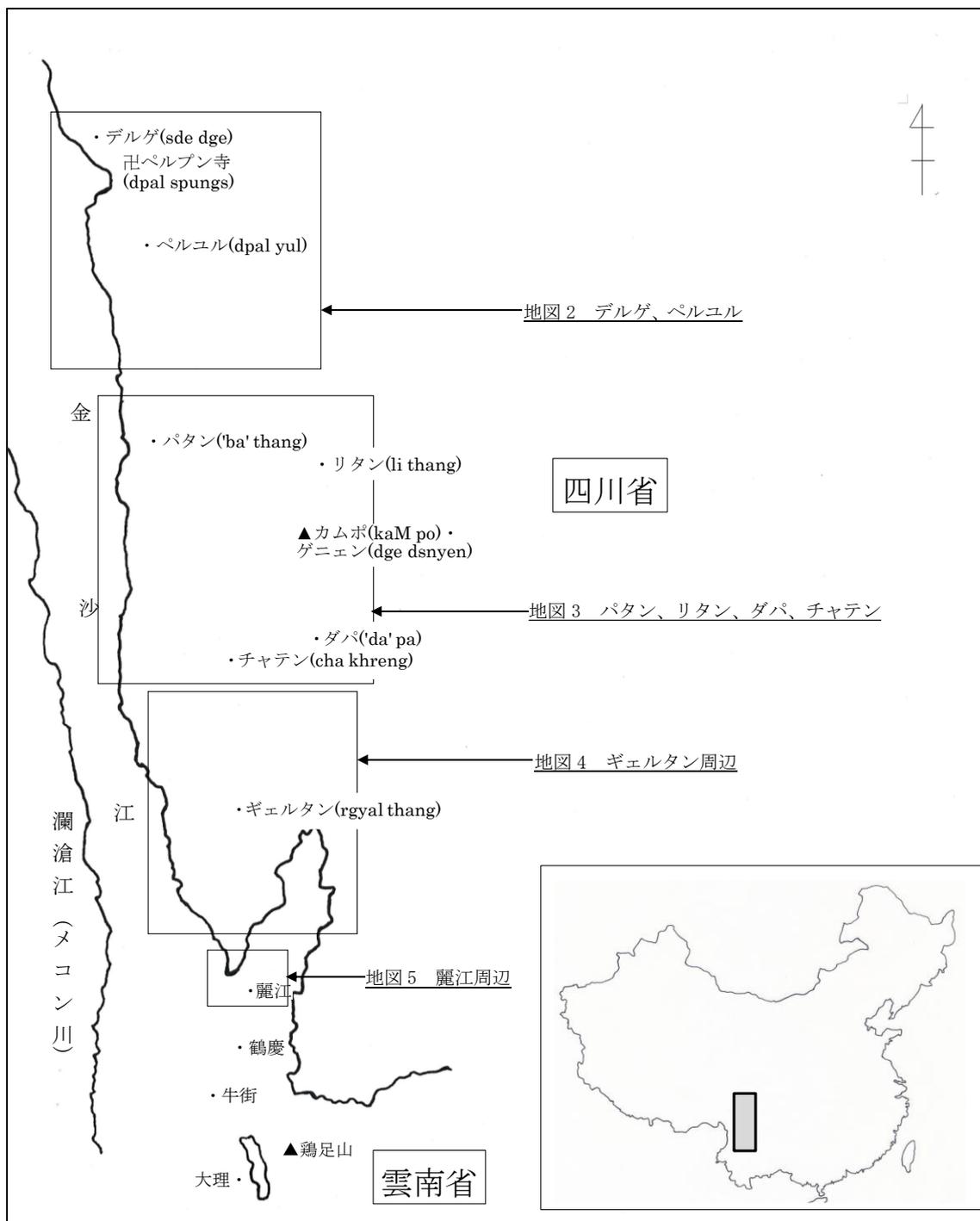
<sup>176</sup> dar gdong は脚注 85 の nga gdong の綴り違いと考えられる。

<sup>177</sup> 白玉県章都郷を指す(2023年10月11日ドルマ・ツェリン聞き取り)。『白玉県地名録』での綴りは gtsang mdo であり(『白玉県地名録』: 44)、DGG 附録の地図では tsam mdo と綴られている(DGG)。いずれも谷または合流地を意味する mdo が後置されているが、この mdo が略されて rdzong が後置されたものと推測される。

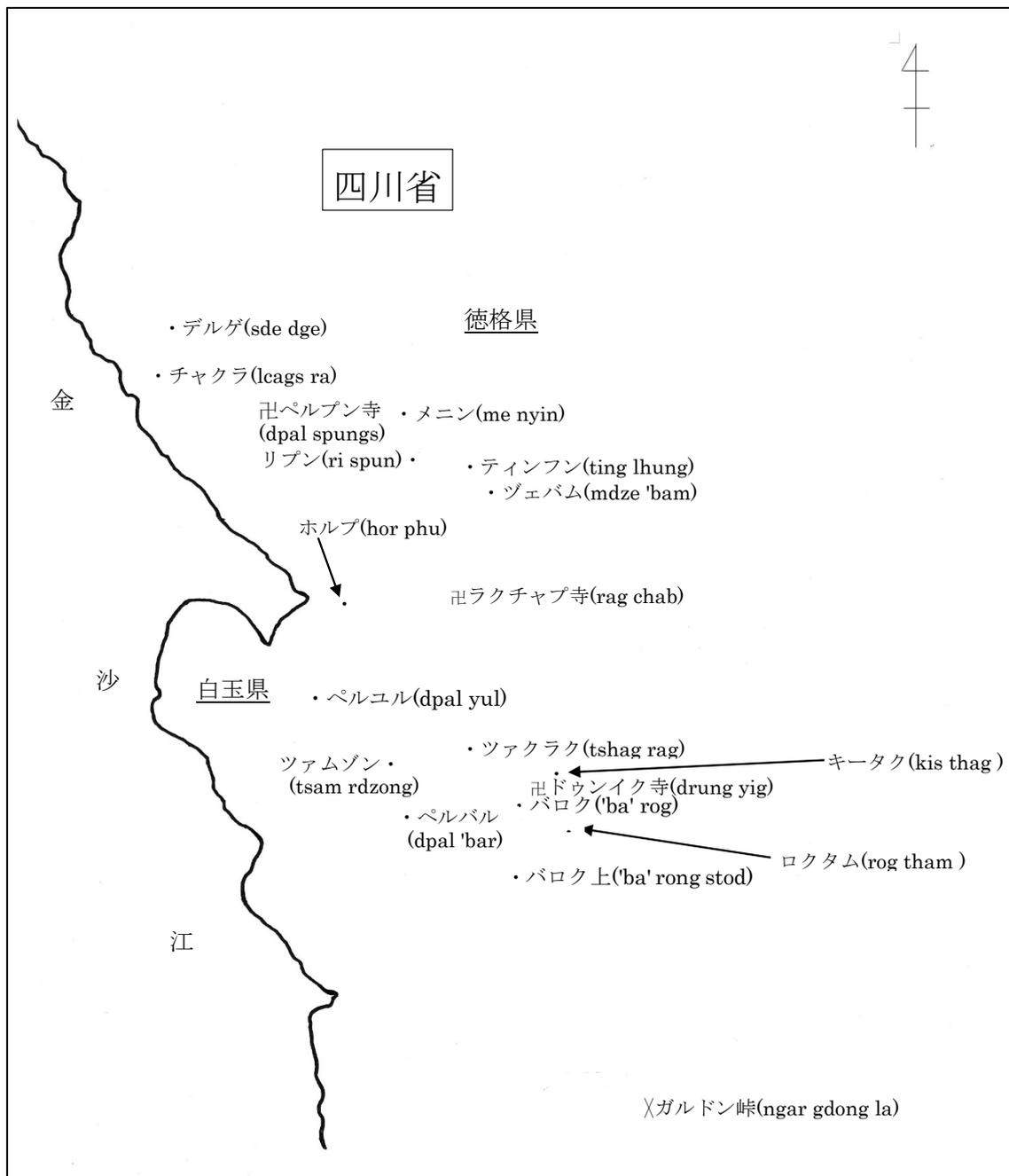
<sup>178</sup> ここで言うゾンとは地方行政区の単位を意味し、ゾンブンとはゾンの最高責任者を指す。

<sup>179</sup> 白玉県章都郷のペルバル(dpal 'bar, 辺壩)と推測される(『白玉県地名録』: 44)。

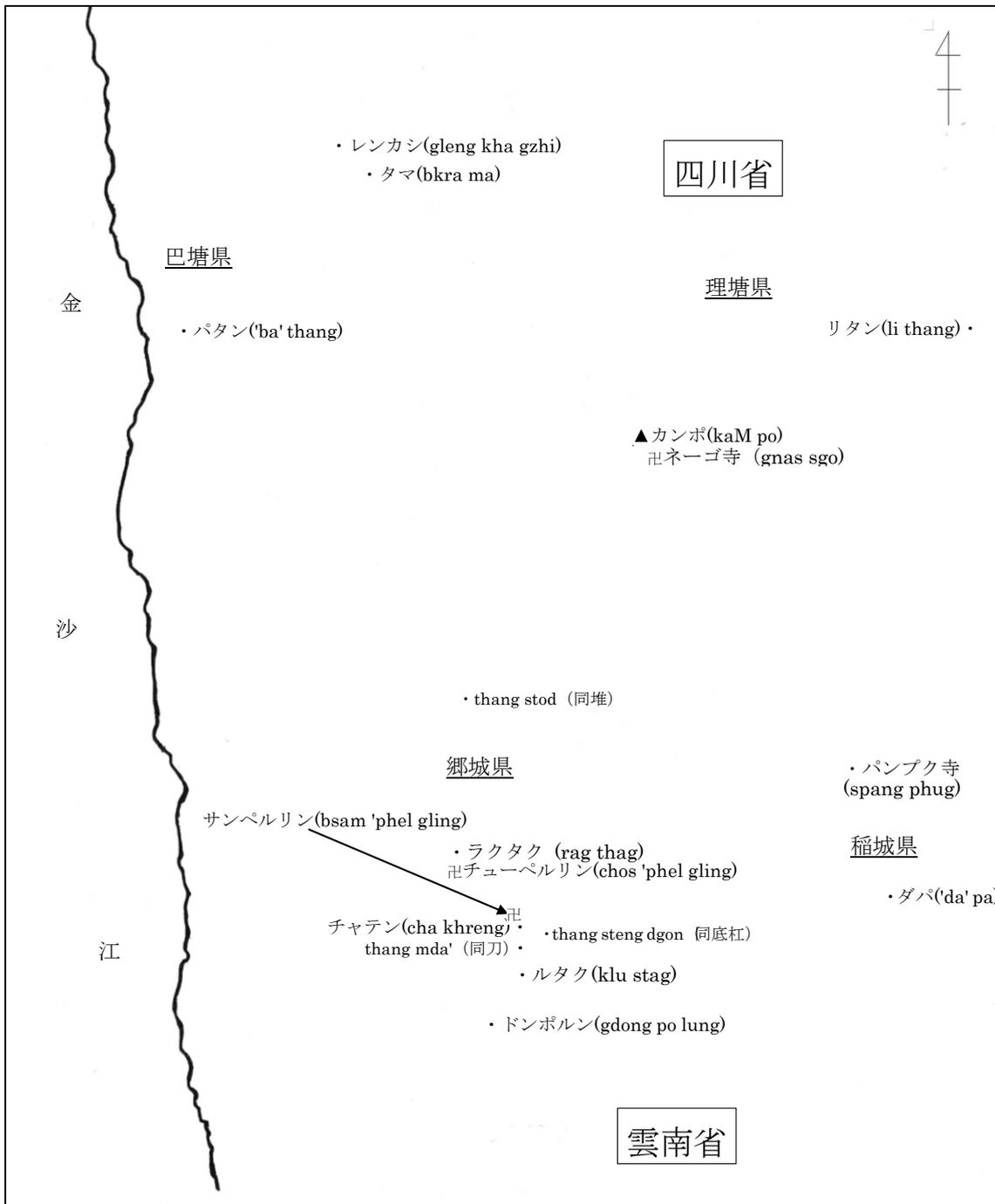
<sup>180</sup> 白玉県麻絨郷内の村を指す(2023年10月11日ドルマ・ツェリン聞き取り)。



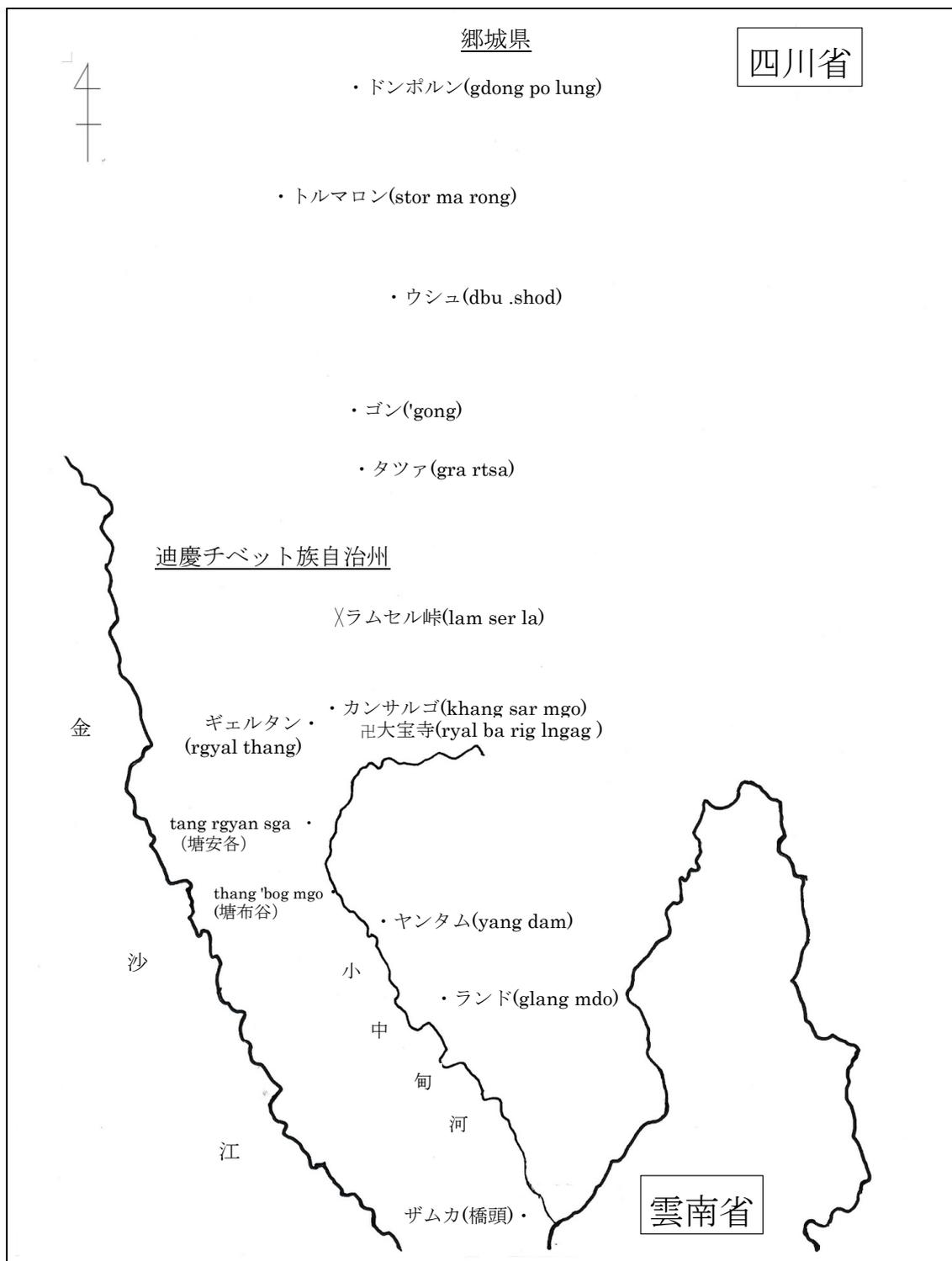
地図1 シトウ・パンチェン 第1回麗江行(筆者作成)



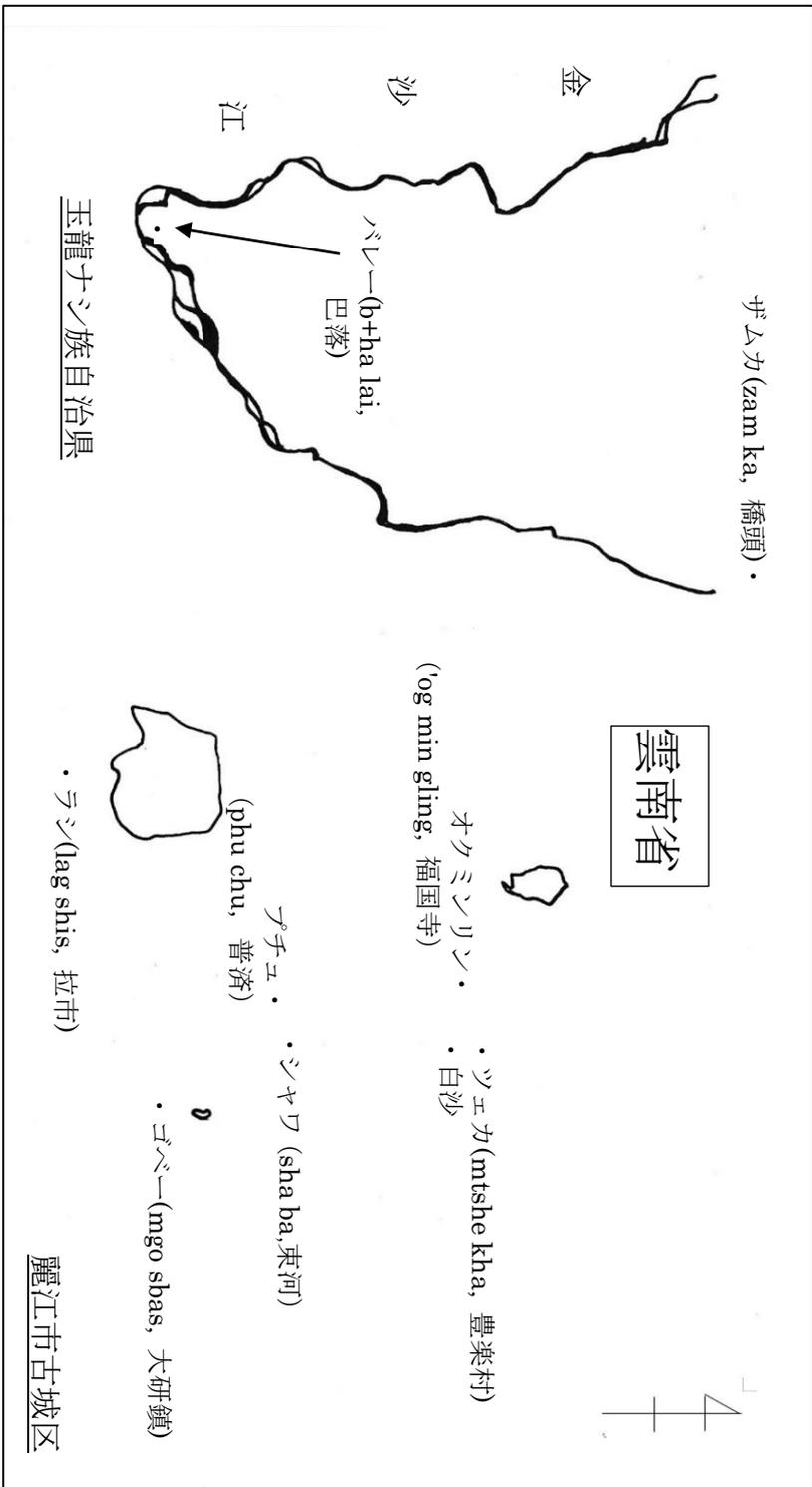
地図2 デルゲ、ペルユル(筆者作成)



地図3 パタン、リタン、ダバ、チャテン(筆者作成)



地図4 ギェルタン周辺(筆者作成)



地図 5 麗江周辺(筆者作成)

○史料

<チベット語>

[SP](『シトウ・パンチェン自伝』)

si tu paN chen chos kyi 'byung gnas, *ta'i si tur 'bod pa karma bstan pa'i nyin byed kyi rang tshul drangs por brjod pa dri bral shel gyi me long shes bya bzhugs so* (*The autobiography and diaries of si tu pañ chen*), ŚATA PITAKA Vol.77, New Delhi: International Academy of Indian Culture, 1968.[BDRC: W00KG09387]

[SPSB](『シトウ・パンチェン著作集』)

si tu paN chen chos kyi 'byung gnas, *ta'i si tu pa kun mkhen chos kyi 'byun gnas bstan pa'i nyin byed kyi bka' 'bum* (*Collected works of the great ta'i si tu pa kun mkhen chos kyi 'byun gnas bstan pa'i nyin byed*), Vol.14(a). Kangra, HP: Palpung Sungrab Nyamso Khang, 1990.[BDRC: MW26630]

[SPSB-P] 『シトウ・パンチェン著作集』ペルブン版)

si tu paN chen chos kyi 'byung gnas, *si tu paN chen chos kyi 'byung gnas kyi bka' 'bum*, Vol. cha, ja, nya. sde dge rdzong: dpal spungs thub bstan chos 'khor gling. [BDRC: MW2KG200901]

[SPSB-S](『シトウ・パンチェン著作集』四川版)

si tu paN chen chos kyi 'byung gnas, *si tu paN chen chos kyi 'byung gnas kyi bka' 'bum bzhugs so*, (a)(嘎瑪降沢編『司徒班欽文集』14卷)、四川民族出版社、2014年。

[VDS] 『ゲルク派教法史』

sde srid sangs rgyas rgya mtsho, *dga' ldan chos 'byung vaiḍūrya ser po*. 『格魯派教法史 黃琉璃宝鑑』中国藏学出版社、1989年。

<漢文>

康熙『鶴慶府志』: 康熙 53(1714)年序刊、佟鎮・鄒啓孟纂修、康熙『鶴慶府志』(『北京図書館古籍珍本』45、史部地理編、書目文献出版、19年、所収の康熙 53(1714)年刻本影印を使用)。

光緒『鶴慶州志』: 光緒 20(1894)年序刊、楊金和・楊金鎧撰、光緒『鶴慶州志』(大理白族自治州白族文化研究所編『大理叢書・方志篇』卷八、民族出版社、所収の光緒 20(1894)年排印影印を使用)。

『鷄足山志』: 康熙 31年(1692)序刊、范承勳撰『鷄足山志』(『四庫全書存目叢書』史部、第 238 冊、莊嚴文化事業有限公司、1996年、所収の北京国家図書館蔵の康熙刻本影印を使用)。

乾隆『麗江府志略』: 乾隆 8(1743)年序刊、管学宣・万咸燕纂修、乾隆『麗江府志略』(麗江県志編委会辦公室 1991年編印、所収の点校を使用)。

光緒『麗江府志』: 序刊年不明、陳宗海・冒沅総修、光緒『麗江府志』(政協麗江市古城区委員会『麗江市古城区政教文史專輯之一』、2005年、所収の点校を使用)。

- 『木氏宦譜』:道光 21(1841)年序刊、撰者不明『玉龍山靈脚陽伯那木氏土司賢子孫大族宦譜』(『木氏宦譜』雲南美術出版社、2001年、所収の抄本影印版を使用)。
- 『徐霞客游記』:崇禎 15(1642)年序刊、徐弘祖撰『徐霞客游記』(褚紹唐・吳応寿整理『徐霞客游記』上海古籍出版社、2010年、所収の点校を使用)。
- 康熙『雲南通志』:康熙 30(1691)年序刊、范承勛・王繼文修、吳自肅・丁煒纂、康熙『雲南通志』(『中国地方志集成・雲南府県志輯』(1)、鳳凰出版社・上海書店・巴蜀書社、2009年、所収の康熙刻本影印を使用)。
- 光緒『新修中甸序志書』:光緒 10(1884)年序刊、吳自修・張翼夔纂修、光緒『新修中甸序志書』(『中国地方志集成・雲南府県志輯』(82)、鳳凰出版社・上海書店・巴蜀書社、2009年、所収の光緒 10(1884)年稿本抄本影印を使用)。
- 民国『中甸県志稿』:民国 28(1939)年序刊、段綬滋纂修、民国『中甸県志稿』(『中国地方志集成雲南府県志輯』(83)、鳳凰出版社・上海書店・巴蜀書社、2009年、所収の民国 28(1939)年稿本抄本影印を使用)。

○参考文献

<日本語>

- 石濱裕美子(1988)「グシハン王家のチベット王権喪失過程に関する一考察—ロブサン・ダンジン(Blo bzang bstan 'dzin)の『反乱』再考」『東洋学報』69(3・4)、pp.337-357。  
—— (2001)『チベット仏教世界の歴史的研究』東方書店。
- 加藤直人(1986)「ロブサン・ダンジンの叛亂と清朝—叛亂の経過を中心として」『東洋史研究』45(3)、pp.28-54。
- 黒澤直道(2007)『ナン(納西)族宗教經典音声言語の研究—口頭伝承としての「トンバ(東巴)經典」』雄山閣。
- 小林亮介(2011)「一九世紀末～二〇世紀初頭、ダライラマ政権の東チベット支配とデルゲ王国(徳格土司)」『東洋文化研究』13、pp.21-52。
- 佐藤長(1986)『中世チベット史研究』同朋舎。
- 静春樹(2002)「ガナチャクラと無上瑜伽階梯における『行』の体系」『密教文化』209、pp.63-103。  
—— (2009)「プトゥンのガナチャクラ儀軌『大楽遊戯』について」『印度學佛教學研究』58(1)、pp.73-77。
- 立川武蔵・頼富本広(1999)『チベット密教』春秋社。
- 山口瑞鳳(2004)『チベット』上・下、東京大学出版会。
- 山田勅之(2011)『雲南ナン族政権の歴史—中華とチベットの狭間で』慶友社。  
—— (2015)「カンドゥ問題をめぐる清朝とダライラマ政権の対応—17世紀後半(康熙朝初頭)の清チベット関係」『アジア・アフリカ言語文化研究』90、pp.79-103。

<チベット語>

[DGG] (『徳格土司伝記彙編』)

rab brtan dge legs phun tshogs, *sde dge'i rgyal rabs*. 降洛・格来彭措編『徳格土司伝記彙編』四川民族出版社、2021年。

<中国語>

・工具書、編纂資料

『白玉県地名録』: 白玉県地名領導小組編(1986)『四川省甘孜藏族自治州白玉県地名録』。

『巴塘県地名録』: 巴塘県地名領導小組編(1986)『四川省甘孜藏族自治州巴塘県地名録』。

『稻城県地名録』: 稻城県地名領導小組編(1986)『四川省甘孜藏族自治州稻城県地名録』。

『稻城県志』: 四川省稻城県志編纂委員会(1997)『稻城県志』四川人民出版社。

『徳格県地名録』: 徳格県地名領導小組編(1986)『四川省甘孜藏族自治州徳格県地名録』。

『洱源县志』: 中華人民共和国地方志叢書『洱源县志』編纂委員会編(1996)『洱源县志』雲南人民出版社。

『理塘県地名録』: 理塘県地名領導小組編(1986)『四川省甘孜藏族自治州理塘県地名録』。

『納西地名』: 黒澤直道・和力民・山田勅之編(2020)『納西語地名彙編』社会科学文献出版社。

『郷城県地名録』: 郷城県地名領導小組編(1986)『四川省甘孜藏族自治州郷城県地名録』。

『郷城県志』: 郷城県志編纂委員会編(1997)『郷城県志』四川大学出版社。

『中甸県地名志』: 中甸県人民政府編(1984)『雲南省中甸県地名志』。

『中甸県志』: 雲南省中甸県地方志編纂委員会編纂(1997)『中甸県志』雲南民族出版社。

『蔵漢』: 張怡蓀(1993)『蔵漢大辞典』上・下、民族出版社。

『蔵区漢蔵対照』: 李万瑛・達哇才讓・加羊達傑編(2017)『青川甘滇四省蔵区寺院山川名漢蔵対照』民族出版社。

『蔵語人名地名』: 陳觀勝・安才旦編(2004)『常見蔵語人名地名詞典』外文出版社。

・論文

馮智(2021)「雍正年間八世司徒雲南之行及其文化交流—基於『八世司徒伝』史料研究」『中国蔵学』148(3)、pp.34-42。

木仕華(2022)「論司徒班欽・確吉炯乃的三次麗江之行」『西藏大学学报(社会科学版)』152(4)、pp.60-71。

李汝明(2003)「鷄足山悉檀寺与尋踪記」『玉龍山』116、pp.46-48。

李学竜(2014)「藏族鷄足山朝聖初探」『宗教学研究』1、pp.162-165。

<英語>

Douglas, Nick & White, Meryl. (1976) *Karmapa: The Black Hat Lama of Tibet*. London: Luzac.

Jackson, David Paul Ed.(2009) *Patron and Painter: Situ Panchen and the Revival of the*

*Encampment Style*. New York: Rubin Museum of Art.

Rock, Joseph. F. (1947) *The Ancient Na-Khi Kingdom of Southwest China*, Cambridge: Harvard University Press.

Smith, Gene.(1968) *Introduction*. In *si tu paN chen chos kyi 'byung gnas, tA'i si tur 'bod pa karma bstan pa'i nyin byed kyi rang tshul drangs por brjod pa dri bral shel gyi me long shes bya bzhugs so (The Autobiography and Diaries of si tu pañ chen)*, New Delhi: International Academy of Indian Culture, pp.5-17.

—— (2001) *The Diaries of si tu pan chen*, “Among Tibetan Texts: History and literature of the Himalayan Plateau”, Boston: Wisdom Publications, pp.87-95.

<インターネット>

BDRC(Buddhist Digital Resource Center)「重依寺」(<https://library.bdrc.io/search?q=“重依寺”&lg=zh-hant&t=Place&s=closes matches forced>) 2023年3月15日アクセス。  
石劉棟(2023)「關於明代麗江版藏文大藏經『甘珠爾』刊印地点和普濟村保存有一卷麗江版藏文大藏經『甘珠爾』的查証」『納西話實』(<https://mp.weixin.qq.com/s/UC4Fka-6iyLASJF70xC-Sw>) 2023年9月23日アクセス。